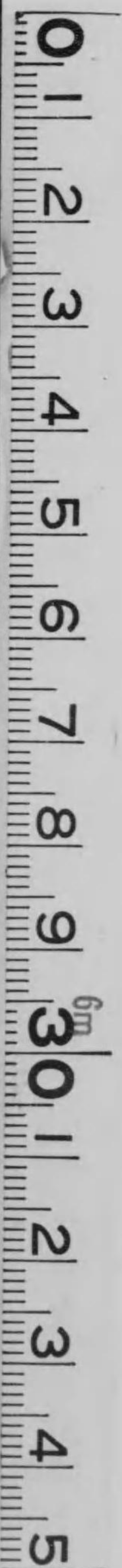
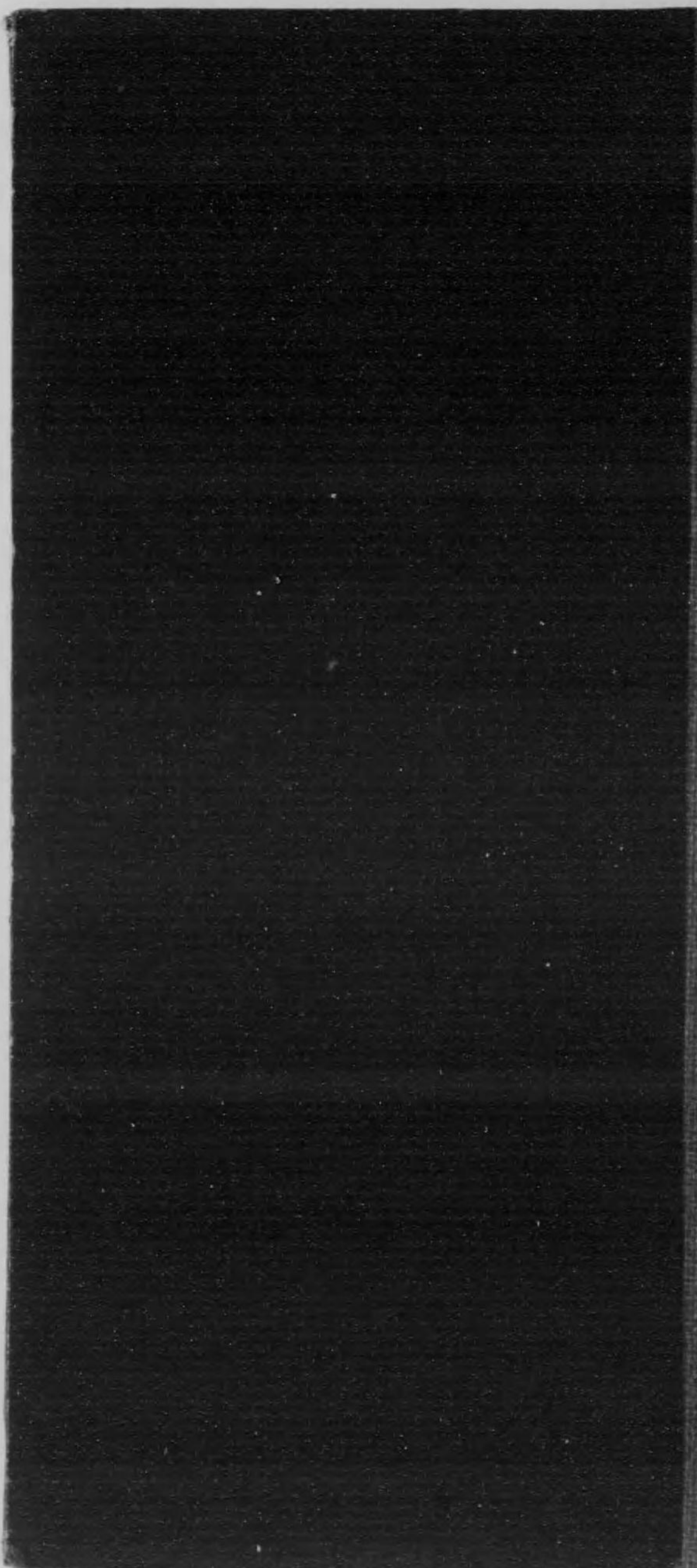


始



70
333



26. 5. 16



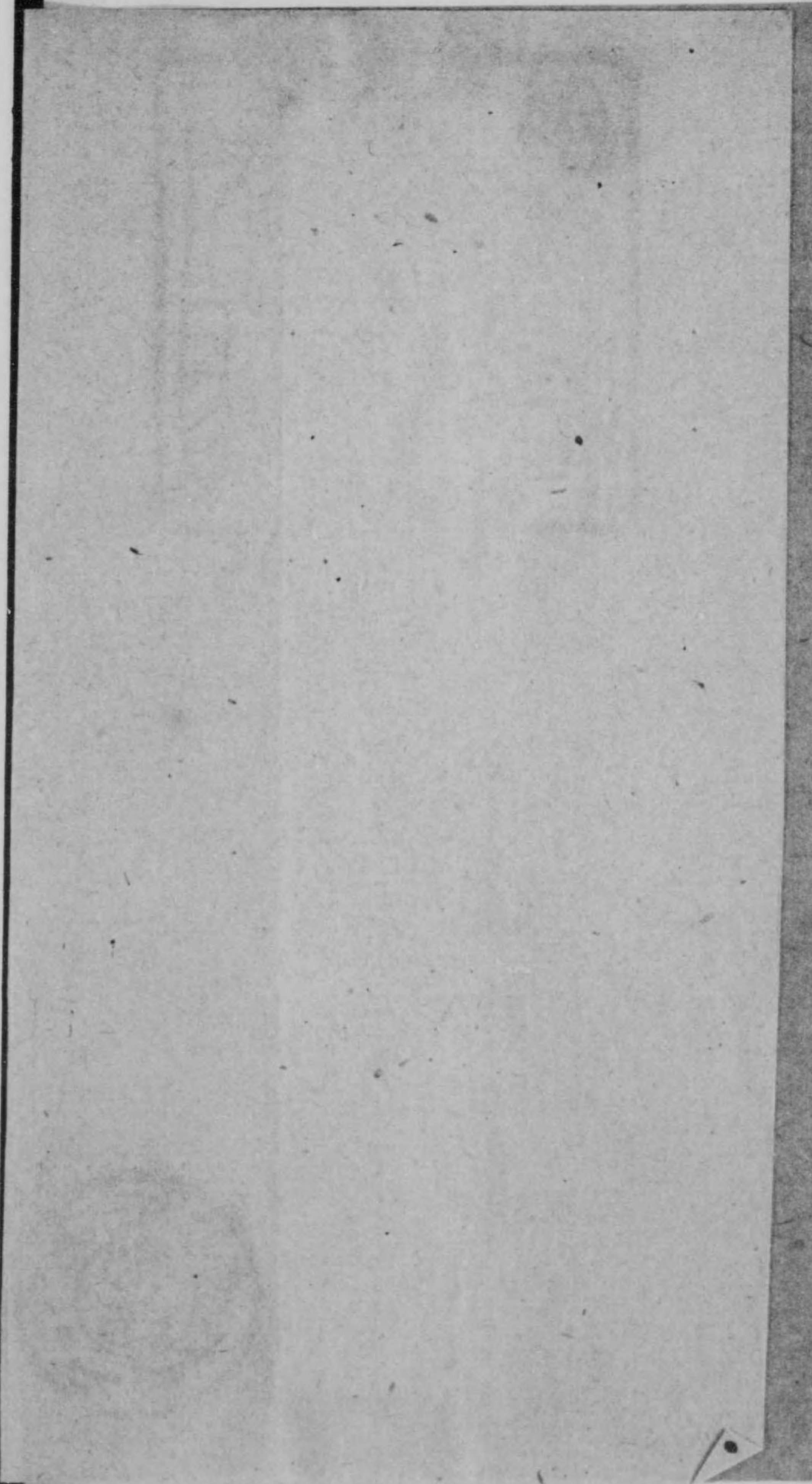
大正政界

界之裏面

城北隱士



欠



欠

比するときは、其の實力未だ遠く相當らざるものあり、
其の是非は暫く措き、事實此の如くなる以上は、今日の
事、閥族政治家たるを、將た政黨の首領たるを問はず、
苟も元老の後塵を拜し、其の願使を甘んずるに非ざれば、
絶て政局に立つこと能はざるの現状に在るを奈何せん。
此の如く種々雑多の勢力の犬牙錯雜せる反照として、
立憲の大義未だ明かならず、政權の授受は公明正大を缺
き、主として陰謀奸策の上に行はれ、黒幕裏面の策士謀
士が政治家と稱せられ、群衆心理を挑發驅使して其の野

心を遂ぐるに巧なる破壊的煽動家が、國士と呼ばるゝの現狀に於いては、理性を没却して感情に馳する所の政變が、幾回繰返さるゝに至るも、向上路上、一步も前進する能はざるは、自明の理と謂はざるを得ず。

著者は夙に二大政黨主義を以て、憲政濟美の大道と信じ、諸有の舊勢力を打破して、政界の積弊を一掃し、國民の全勢力を基礎とし、主義あり、手腕あり、抱負あり、勇斷あり、建設的理想を有せる諸有政治家を網羅せる所の、有力且健全なる二大政黨對立の形勢を誘起し、國民

環視の内に善政の實現に競争せしめんと志せるもの、而して本書は著者が大正第一次の政變より第二次政變を経て大隈内閣の組織に及び、更に最近大隈内閣總辭職と其の改造に至る迄の政情を爬羅剔抉して、前後十數回に涉り記實論評したるものに係る、今日之を一小冊子に編輯し、新たに結論を附して江湖に薦むるは、衷心聊か政界の革新に資せんご欲する、猷芹の微誠に外ならざるなり、幸に江湖の一顧を得ば、著者の至榮とする所なり。

大正四年八月

城北隱士識す

大正政界之裏面

目次

第一章 大正第一次政變の裏面……………一

政變の始末——西園寺内閣瓦解の原因——元老會議の舊劇——桂公の出馬——憲政擁護、閥族打破の運動——新政黨組織の計畫——國民黨の分裂——政國合同の問題——大石、犬養の乖離——原の政國合同拒絶——政國合同の成否——猛烈なる憲政擁護運動——川崎造船所と權兵衛伯——桂内閣と政國兩黨の對戦——内閣總辭職の英斷——權兵衛の出馬——山本内閣の組織難——國民黨入閣の死物狂の運動——政友俱樂部の出現——不可思議なる嚴正中立——閥族擁護、憲政打破——大正第一次政變の結末——後藤男の觀測——原敬の斷案と岡崎の批評——桂公の欺かざる告白

— 6 —

第二章 大正第二次政變の裏面……………四三

大正第一次政變の真相——薩摩財閥の陰謀——大隈伯を取り遁した——國民黨の御迷論——案外脆い山本内閣——武士道の蒸發——不徳漢揃の内閣——議會の醜態暴露——心にもなき院議尊重——憲政の神の正體——停會詔勅の露出——内閣交迭の正道

第三章 大隈内閣組織の真相……………五四

海軍收賄問題と山本伯——意外なる山縣公の隈伯推薦——松方侯の隈伯反對——清浦子の出現——清浦子の遁竄——松方侯自立の魂膽——井上侯の歸京と内田山邸の會合——西園寺侯の出慮難——大隈伯推薦の會議——大隈伯の出慮——政友會の惡罵——島田沼南の狂奔——内務大臣熱望の木堂——愕堂入閣の理由——理論の矛盾——大隈伯の立場——政友會の失望——國民劇の實現歟

— 7 —

第四章 政界の内幕と臨時議會……………九五

犬養、大浦、尾崎の内相運動——專任内務大臣は誰——同志會内の大臣候補者——不評判の大浦農相——八代海相の估券の下落——女尊男卑の尾崎法相——正義擁護の花井博士と辯護士の花井さん——原總裁と加藤總理の對論——アマゴウの犬養木堂——大臣熱望の關直彦の狂奔——原御大將と奥田、大岡、元田の三鎮臺——臨時議會と政國連合の端緒——三派合同は痴人の夢——武富遜相の武者振——議員を子供扱にする大隈伯——通常議會は解散歟無難歟——政薩國の連合密約

第五章 地方遊説と政界の裏面……………一五六

多忙なる地方の政戰——精力絶倫の大隈總理——大政一新は大隈伯の使命——同志會の遊説——憲政の神の詭辯——木堂の愕堂攻撃——時勢後れの孤壘主義——政友會の地方遊説——大岡の尾崎を乞食呼はり——地方戦より中央戦へ——政友會の魂膽——政友會の希望——岡崎と原との反目——伊東、後藤、岡崎の會合——樺太事件の連累——滿鐵の紛争——大八の罪惡——不適任の野村總裁——中村中將の滿鐵總裁——滿鐵の根本的改革——山内中將茶番の腹切——日本刀を辱しめたる山内中將——尾崎法相への所望

第六章 歐洲大亂と日獨戦争……………一三八

炎熱と農作——政戦休止と海外事變——歐洲大亂と日英同盟——英國よりの交渉——元老會議と政府の態度鮮明——大隈伯の御馳走政略——大岡の膠州灣還附論と高橋の不景氣論——不景氣製造の本家は政友會——北守南進の犬養木堂——日英交渉遲滞の真相——遲引は結果に於いて良好——大隈内閣乗取の失敗——最後逆戻と貴族院——山本閣海軍の不平——日獨同盟論者の失望——袁世凱とモリソンの運動——無言拒絶の獨逸——大詔煥發と膠州灣——膠州灣の將來——租借全部の内容——獨逸の膠州灣還附——山東鐵道問題——舉國一致と政友會陣笠の大満足——減租熱の立消

第七章 軍國議會と政局……………一五九

時局と軍國議會——國民黨と政友會の意向——新聞紙と國民の意向——臨時議會の召集——開院式に原不敬——時局問題と初日の議會——大隈伯と大岡の對決——政友會と加藤男——袁世凱と犬養木堂——孫逸仙と犬養木堂——大隈伯と政友會の陣笠——豫算總會と政友會

—バイカル博士と加藤男— 學國一致を強いざる大隈伯— 責任内閣と國民の信任— 學國一致の議會— 大岡硯海の失言— 中正會と國民黨の養成— 同志會代表の島田沼南— 權兵衛の暗中飛躍— 大隈内閣の前途— 政國の活動と同志會の對抗— 後繼内閣と西園寺内閣— 西園侯と國民— 議會解散と各派の盛衰

第八章 千變萬化の内外の政局

一八一

好運なる大隈伯— 元老と大隈伯との會合— 反對黨の臂押と元老の底意— 後藤男の日支銀行— 新聞雜誌檢閲と加藤外相— 無責任極まる新聞紙— 膠州灣包圍と陸海軍の活動— 山東鐵道の占領と支那根生— 袁世凱と獨逸— 南洋諸島の占領— 大隈内閣と來年度の財政計畫— 戰艦一噸九百圓に値下と山權の醜體— 政務官制度の新設— 北里博士と一木文相— 北里博士の新聞政略と無政府主義— 不行跡な北里先生— 福島都督と佐久間總督— 大隈内閣と總督政治— 大石内相説と片岡總督説— 後藤男の暗中飛躍— 逆境に沈淪したる官僚

第九章 議會開會前の政界

二〇三

今期議會の政戦— 新聞紙と輿論— 政友會と國民黨— 貴族院と同志會— 二箇師團増設問題— 外交問題と後藤男— 領土擴張主義の本領— 加藤男の外交— 青島と南洋— 米國と比律賓— 航路補助の政國二黨— 内相問題と一木文相— 臺灣總督と陸海軍の競争

第十章 議會解散と政局の前途

二二二

豫想されたる解散— 現政府の政策— 公債償還基金案と海軍の整理— 日獨戦争と政友會— 政友會の旗印— 増師問題と國民黨— 奇怪なる内閣乗取策— 男性的の大隈内閣— 國民黨の薩派に對する忠勤振り— 總選舉の旗幟— 總選舉と政局の將來

第十一章 總選舉前の政略

二四二

新内相と新農相— 大浦内相の評判— 河野農相の評判— 河野新農相の評判— 大石入道の譚述— 裁松大石を失ひたる同志會— 政友會の暗闘— 野田東拓と改野滿鐵— 不運の國民黨— 動搖中の國民黨— 國民黨の元老守此先生の脱黨— 血迷へる國民黨の内幕— 政友會の陣笠— 傳染病研究所と政國兩黨— 公盜擁護一點張の政友會— 研究所の六本柱

を自殺せしめたる北里先生——北里博士と青山博士——恥を知らぬ山内中將——墮落したる貴族院——米價調節と一般の人氣——大隈伯後援會——元老と大隈内閣——現内閣と貴族院——政薩國の反抗運動——同志會の活動——理想選舉と同志會——大浦内相と選舉取締——總選舉の豫測——當にならぬ中立候補者——日糖議員の再選運動

第十二章 天下分目の總選舉戰……………二六六

分水嶺に立てる國民——大臣の立憲的遊説——お伽噺し蛙の逆見——天下の分野定まらんぞ——菅庵將軍の形勢觀望——政友會の末路と清盛の最期——後藤男の暗中飛躍——變爵の脱線は脱線に非ず——政界の二人三脚競走——黨の巢に育ちし杜鵑——口幅の廣き大養黨——政黨内閣期成同盟會——天下の事斯の一舉に在り

第十三章 總選舉の結果と新政局……………二八〇

總勢二十四萬と註す——政府軍の大捷——悲惨なる政友會の敗恤——秦を滅ぼす者は六國に非ず——的外れの國民黨——拗れ者と事大政治家の迷岐——官僚の屏息——政界の新過去編

——政國二黨の前途——同志會の改造と政府黨の統一

第十四章 臨時議會と政薩國の反對運動……………二九四

大隈内閣毒殺運動——政薩國の聯合運動——焼打は非立憲的——對支外交の成功——要求條件と所謂希望條件の差別——不當支出問題——有名無實の選舉干渉——政薩國の大々的失敗

第十五章 大隈内閣の運命と内外の政局……………三〇九

政權爭奪熱中の帝國議會——武士道を外れた政爭——機會を待つが政治家の秘策——大隈内閣の壽命——龜裂を生ぜんとする大隈内閣——大隈内閣の命脈延長の良策——新政黨の組織の急務——元老會議の價值——日露同盟は天下の大勢——地方遊説と縣會議員總改選

第十六章 元老と政薩國に包圍せられたる大隈内閣……………三二三

參政官の人物評——中正會と菊池武徳——元老會議と大隈内閣——松方侯對加藤男——薩派勢力復活の魂膽——松方侯對加藤男の絶縁——電報せる井上侯——西園寺侯と政國兩黨——

政友會と大浦内相——選舉干渉を事實的に行ひたる政友會——尾崎法相と司法官の對抗——
大浦内相と平沼検事總長——瀆職罪と一萬圓問題——政友會と天理教問題——政界の現状——
——大隈内閣の總辭職

第十七章 大隈内閣總辭職と政界の裏面……………三四一

政薩國の毒殺計畫——小山温の暗中飛躍——大浦内相の辭職——大隈内閣總辭職——司法官
の手に依つて轉覆せられたる大隈内閣——總辭職と元老の居据勸誘——八月四日の閣議——
隈伯の内閣組織運動——加藤中將の入閣と海軍擴張問題——結局一部改造の内閣——片岡の
入閣運動失敗——後藤男の狂奔——尾崎愕堂の醜體——大隈内閣改造の始末

第十八章 結 論……………三六四

西園寺内閣と桂内閣——山本伯の政薩聯合内閣——大隈伯の同志會内閣——大隈伯の早稻田
内閣——内閣の短命——政黨の勢力——現時の政狀——政黨内閣實現の困難なる理由——二
大政黨對立と政黨内閣——陸海軍問題と御用商人の跋扈

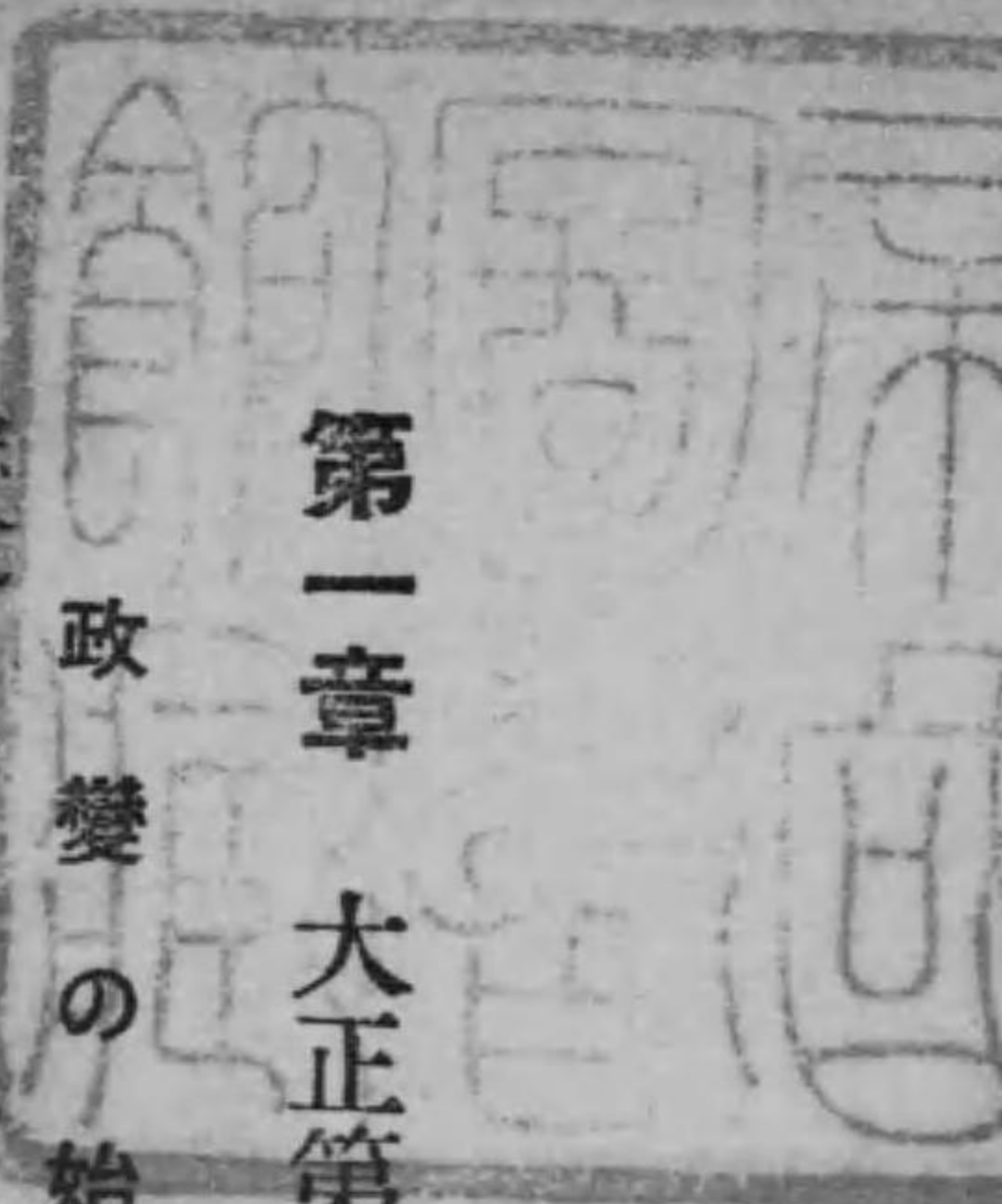
大正政界之裏面

城北隱士著

第一章 大正第一次政變の裏面

政變の始末

大正の政變は今日より回顧すれば唯だ一場の夢であつた、西園寺内閣たいせ作たよれて桂内閣起り、桂内閣又忽ち作たよれて山本内閣忽ち起りたるが如き、表面へうめん



の激變は驚心駭目を値せるにも拘らず、其の裏面より看來るときは、唯だ是れ一場の茶番狂言に外ならなかつた、試に見よ憲政擁護、閥族打破を叫破したる徒輩が、一轉薩閥と提携して、非政黨内閣を組織したり、憲政擁護の神様と崇められた犬養尾崎の兩人が、大臣に成り損なつたとあつて、薩閥擁護、憲政打破を叩いた口で、再び憲政擁護に舞ひ戻つて、群衆心理を煽動して天下の良民を瞞着したる仕打などは、怪しからぬ政治道徳上の罪惡と謂はなければならぬ、又二大政黨主義を以て責任内閣制確立の必要條件とし、政黨内閣實現の前提として、新政黨の組織に努力した人々を、或は國賊と譏誣せしめ、腐腸漢と惡罵せしめしが如きは、冠履轉倒、言語道斷と謂はなければならぬ。

今や春過ぎて夏來り、夏過ぎて秋立ち返り、清風正に天地の暑熱を吹き拂ひ、浮動せる人心を沈靜せしめて反省時期に入らしめんとする折柄、一時平地に波瀾を起し、國家の平和を攪拌した憲政擁護運動の、全然無意義であつたことを、國民と俱に知らんが爲に、大正政變の裏面の真相を直説活寫して、以て江湖の識者の一餐に供するは、今こそ正に其の時機を得たりと思ふ。

西園寺内閣瓦解の原因

先づ順序として説き起す、西園寺内閣瓦解の原因は何かと云へば、畢竟彼の大聲公約したる制度整理が、實は立派な駄法螺に過ぎなかつた結果ちや、四十四年の十二月に整理局を設置したるより、大正元年の十二月の總

辭職當時に至るまで、滿一箇年間政費削除の廣告のみで、實は何等の方針も何等の成案も立つて居ないので、内閣自身出産に臨んで腹の中に子のないのど一般、大煩悶大痛苦を唸つて居る最中、恰も好し上原陸相より二箇師團増設問題の突發に逢着した、此の突發も實は唯表面に然見ゆるのみで内實は西園寺侯自身先刻裏書をした問題であつた、而已ならず、其の解決方は如何様にもあり、桂公も豫め此の問題の提出さるべき注意を與へ、場合に依りては應分の助力をも辭さないと約束して居たほどであつた、其れにも拘らず西園寺内閣が桂冠と出たのは、畢竟二箇師團問題を表面の好辭柄に、前記の裏面の制度整理の不始末、豫算編成の困難を、體能く葬つて遁げたのぢや。

元老會議の舊劇

乃で元老會議と云ふ舊劇的一幕が開かれたが、是は宛然たる小田原評議で、長たらしく十三四日も繼續した、眞先に候補に上つたのが寺内總督、是れは二箇師團問題の張本人とあつて、一議にも及はず落第、次に松方侯が推された、松方侯は老軀其の任に堪へすと云ふ口實の下に薄々氣取つた財政上の難局を避退し、一先づ山本權兵衛伯に譲つた、山本伯も亦辭したので、山縣公の直參たる平田子にお鉢が廻つたが、其の平田子も亦先輩に遠慮とあつて前同断に固辭したので、廻り廻つた御鉢の末が桂公の出馬と決まつた。

桂公の出馬

無論桂公は自身内大臣たる職責上、元老會議では固く沈黙を守つて居た桂公が食指を動かしたなど聞けたのは、全く世間の誤傳であつたが、結局十二月十七日に大命は桂公に下つたのである、然し桂公の推薦者は單に元老會議ばかりでなく、西園寺侯自身が亦實に其一人で、此の場合、時局を收拾する適任者は桂公の外はないと陛下に奏上して、自身亦新内閣を援助すべき約束迄も與へたので、桂公も愈々出馬と決した次第であつた、然るに桂公が其の大命を拜するに就き、及び海軍大臣の留任を求むるに就き、詔勅を請ふこと二回したのが、端なく在野政客の一大問題となつて、所謂憲政擁護、閥族打破の運動も實は之れから惹起された。

憲政擁護、閥族打破の運動

此の發頭人は空際に掀翻し、平地に波瀾を起すことに老功な犬養尾崎の兩人で、一時憲政の神様となつた人ぢや、然しこれは國民が己の健忘症を遺憾なく發揮したもので、既往の西園寺侯の如き、實はこれ以上の事を遣つて居たのぢや、然し此れも民意を無視した長たらしい元老會議に對する激昂から起つた積憤の發露なので、桂公は之が犠牲に揚つた譯ぢや、成程憲政の擁護は立憲政治の存在上、一日も忽諸に附すべからざる事柄、又私黨朋黨の打破も右同然の事であるから、理論上の事としては、大義名分の存する所、公明正大、千歳に亘つて爲すべきものぢや、然るに例の犬養尾崎の兩人は、感情の強い人達で、場當りの芝居を打つに妙を得た老武者、殊に其の大い病の宿痾痼疾は久しいもので、存命中是非一回の入閣を遂

げなければ、死しても瞑せぬと云ふ程のものであるから、矢も楯も耐らな
い、一氣に馬を乗り出したのである、同士の黨與中には先づ慎重な態度を
取つて、形勢を觀望し、敵軍の虚實、友軍の内情を詳悉した上作戦を進め
なければ、名譽を以て抜いた劍を、名譽を以て收むることが出来なくなる
とて、危ぶむ論者が多數であつた、結局意見が二派に分れた、是れ亦已む
を得ない次第ぢや、又右の自重派は凭る政界變動の際には、必ず火事場泥
棒が出て來たり、御用商人が政治家に軍資金を攫ましたりして、群衆心理
を憲政擁護の美名の下に指導せる眞面目の政治運動を、如何なる意外の
目的に利用するやも知れずとて、嚴重に警戒して居た、果然井の角將軍は
既に川崎造船所に飛込だと云ふ飛報が、或る消息通の耳朶に閃電光の如く
響いた。

新政黨組織の計畫

之と同時に、話が變つて、在朝の桂公も愈々年來の宿志實現の心緒を決
し、都下の新聞記者を招いて新政黨組織の計畫を發表し、憲政有終の目的
を達するには、天下の同志と一大公黨を組織して、以て輿論政治の實を擧
ぐるの外に、執つて進むの道なきことを自白した、さて同時に又桂公の政
策如何と云ふに、犬養一派は勿論國民黨が多年主張して實行し得なかつた
問題を實行しやうと云ふのである、乃ち之を列擧すれば

- 第一 政黨を組織して其の基礎の上に内閣を立て、國勢の擴張を圖り、
憲政有終の美を濟すこと、

第二 外交を刷新し、對支問題の適當なる解決に最善の力を盡すこと、

第三 財政を整理し、財政と經濟との調和を圖るを目的として、五千萬圓乃至六千萬圓の政費の緊縮を加へ、尙ほ歳出入に整理を加へて、大藏證券の發行額を壹億圓より五千萬圓に減少すること、

第四 國防問題其物が、一度び西園寺内閣の執政するや、全く政友會の黨略に供せられたる結果、諸種の感情並に誤解が加はり、國防に對する適當なる國論を定むるの必要あるが爲に、新に國防會議を開き、國防問題に關する解決を下すこと、

第五 財政整理の結果に依り、國民の負擔を輕減するの目的を以て税制の整理を行ふこと、

等を主要なるものとして、其の實行如何に就いては、充分なる成算を有つて居た、之に對する世評は區々であつたが、要するに桂公の過去を咎めて誠意がないと云ふ一派と、桂公が公人としての前非の悔悟と一新の態度とを諒とし、之を助けて一日も早く善政を天下に布き、生民を塗炭に救はんと云ふ一派であつた、兩派訌争の眞最中に俄然として國民黨分裂と云ふ一大變動の突發を見るに至つた。

國民黨の分裂

是は表面上よりは如何にも突發に見ゆるが、實は久熟の問題であつたのである、而して右分裂の動機の首要なるものを擧ぐれば、脱黨者側に於ける政國合同不可能の先見と、行懸りの感情を一掃して、主義政策一貫の立

場から、桂公の新政黨と提携し、平素の主張を實行して、國民に對する多年の責務を果すべしと云ふに在つて、彼の大石、河野の二領袖の如きも、無論憲政擁護、閥族打破の眞摯なる主張者であつたにも拘らず、唯桂公が既に閥族の甲冑を脱ぎ、政黨の軍門に降つた以上、猶ほ執念深く追窮するのは寧ろ感情一片の沙汰で、理論上の事でない、然れば此の際寧ろ彼我の主義政策の一致を認めて、其の實現に提挈し共動すること政治家の責任と信じたのである、而已ならず犬養が立場に踏まへた、政國合同の實現は、到底不可能と看破して居たのである、之に反して殘留黨側に於いては桂公を憎むの餘り、一面其の主義政策を犠牲として薩派呼出しの暗中飛躍を試み、他面實行の望みなき政國合同説を夢み、殊に首領犬養の如きは、合同後の總

務の一人として、派手に切廻さうと云ふが如き誇大妄想狂に罹つてゐた。

政國合同の問題

然らば政國合同の實現は實際果して如何と云ふに、是の事たる、昨冬以來、犬養自ら政友會の尾崎岡崎の兩人に申込んだ問題であるが、幾日経つても要領を得ない、乃て大石は、民黨大會の宣言書は幾分作戰の意味を含べむきを以て、其の三日前迄に政友會の確答を得べきことを犬養に逼つたのである、然るに犬養は三たび之が猶豫を請ふて、結局其の確答を與ふることが出来なかつた、其の結果が即ち大石犬養の乖離となつたのぢや。

大石犬養の乖離

犬養は飽まで政國合同を確信して、降伏的の入黨は斷じてせぬと公言し

大石は政友會の誠意なきを洞察して、犬養が他の奸策に致されてをること
を説破した、同時に政友會に於いては地方八團體の政國合同の希望を、在
京幹部を通じて原、松田に申出て、犬養は犬養で、岡崎尾崎に合同取計の
督促に及んだ、乃で岡崎は政友會最高幹部會に於いて試に合同問題を持ち
出して見ると忽ち原に一喝を喰つた。

原の政國合同拒絶

原の意見は、政友會と國民黨とは歴史上、主義上、思想感情上、餘程の
徑庭距離がある、憲政擁護てふ一時的の運動の爲に提挈するのは兎も角、
其れ以上の合同などは思ひも寄らぬ、早速蹴つて了へどあつた、岡崎の
窘窮や思ふべしで、今迄合同の歩趨に思はず深入して來た關係上、突然拒

絶するとなつては、犬養をして絶望せしめ、剩へ政友會の作戰上にも遺算
を生ずるの虞あれば、其の返答方に就いては、最高幹部の黙認を願置くこ
とにして、岡崎は犬養に向ひ、政國合同は民黨多年の宿望なるも、時正に
桂公の新政黨組織の發表に際し、俄に解黨式を舉行し、政國合同を見んど
せば政友會員にして國民黨に慊らざるものは、此を機として新政黨に趨り
國民黨員にして政友會に慊らざるものは是亦新政黨に赴くべきを以て、政
國合同の目的は適以て新政黨の大成に利するの機會たるに止らん、故に
此の問題は今暫く懸案として、後日の解決を待つを得策とすと答へたの
で、犬養はマンマと其の口車に乗り、成程と合點したのちや、同時に政友
會に其人ありと知られた某策士は、更に犬養に左の言を啖はした、曰はく

政國合同は我々多年の宿望である、然し大石、河野を先鋒として、大臣候補者が多数入黨し來る如きは、政友會の困却も察せられたい、我々政友會員は唯犬養君の入黨を俟つて、君を黨首の一人に仰いで、内部の一大革新を促し、同時に犬養君の入閣を請ひ、大臣の列に推戴せんとするの計劃に在るを以て、新參代議士を成るべく多数に、古參代議士を成るべく少数に、同伴せられんことを希望すと、斯の如く表裏兩面より犬養の虚榮心に投じ、其の猜疑心を防ぐことに勉めて、甘く犬養を丸めこんで了つたものぢや、見るべし、國民黨の内部が、其の主義政策に殉じ、他黨と提携せんとする一派と、主義政策を犠牲にして、唯其の虚榮心を満たし、大臣病を醫せんとするに汲々たるものと、事實上分離の既に久しきことを、然る

に前の理論派は、群疑滿腹、衆難沸騰の際なるにも拘らず、俗論の毀譽褒貶を度外視して、驀然に其の主義に猛前したりし結果として、數多熱狂者の爲に意想外の誤解を受け、意想外の奇禍を買ふに至つたのであるが、同時に後の感情派は一時群衆心理を煽動して、華々しき場當りの芝居を一遍は演じたものゝ大勢一過の今日は、到る處に識者具眼者の指彈を受け、秋風落葉の凋落期に既に早くも入つてをる。

政國合同の成否

然るに話は前に戻つて、政友會幹部に蹴られた犬養は合同問題を怎樣したかと云ふと、既に形勢の非なるを十分察知しながら、猶ほ政國合同を確實なりと觸出して、寧ろ外部の世論を發揮し、輿衆の勢力を以て政友會幹

部に壓迫すべき企謀を懷き、飽くまで群衆心理を煽動し、政國合同は國民の希望なり、時代の要求なりと、新聞に雜誌に、演説に講演に唱道せしめて、大に威赫を試みたが、輿論を尊重するに最も吝なる政友會の頑冥不靈なる、飽迄聞が猿の態度を装ひ、竟に原、松田の口を通じ、犬養にして降伏的に入黨するのなら差支はないと云つたと云ふ嘶ぢや、其處まで犬養の威信も面目も地に落ちたものである、政國合同計畫の斯まで蹉躓しつゝあつたにも拘らず、例の憲政擁護閣族打破の運動は益々猛烈になつて來た。

猛烈なる憲政擁護運動

此の運動は前記詔勅問題に發端したのであるが、一月十七日より二月五日迄、桂内閣に豫算發表が出來兼て停會をしたので、愈々激昂を加へて來

た、此停會は實際事情已むなきものであつた、然るに憲政擁護派は反對に之を以て桂内閣の非立憲と曲解して、之を政争の具に供して、飽迄群衆心理を煽動した、二月五日は愈々内閣と憲政擁護團の對陣となつて、不信任決議案が議會に上つた、右議事以前に、政友會の元田は勅語降下問題、陸海軍官制問題を捕へて質問を試み、桂公は之に對へた、この一段の鞘當は桂公の勝利政友會の失敗に歸したが、都下の新聞は其れを反對に書き立て群衆心理を煽動した、愈々不信任決議案になると、是れは唯一片の感情の發作で、桂内閣の政策の孰れの點を信任しないのか、丸で薩張分らない、唯勅語攻撃の一點張ぢや、曠昔の西園寺侯が、此れ以上の事を爲て居るのをも打ち忘れて、尾崎は桂公を攻めたものぢやが、亢奮過度に及んだ結果、常識

を失つて陛下も人間である以上過失がないにも限らないなど、忠良なる臣民として聞くに耐わざる不敬の言を敢てして、其の言論の進行中、停會の命が再び下るを致したのである、桂内閣對政國兩黨の對戰の、斯くも耐になつた最中、從來政界の裏面深く潜伏して居た海坊主が、突如波面に現れ出た、是れなん例の山本權兵衛伯であつた。

川崎造船所と權兵衛伯

由來川崎造船所は山本、西園寺の侯伯と陰密の握手に依る、西園寺内閣の海軍擴張斷行の結果、自家の造船所に軍艦製造を引請くることになつてゐた、所が這回政變の結果、桂内閣出現し、同時に總理桂公が六百萬圓の擴張費を承認して、餘は國防會議の決議を俟つと云ふことにしたので、軍

艦引請を當にしてゐた川崎造船所と軍艦製造に依りてコンミツションを當にして居た其筋の一派は大狼狽、既に政友會の某々に拂つた約束の手附金が水泡に歸すと云ふので心痛に心痛を重ねた揚句、是非憲政擁護運動を救唆して、自家の目的を達せしめなければならぬとあつて、其の第一着として一月十二日の犬養の川崎造船所訪問とその款待となり、繼いで某待合の某々の密談となり、其の結果幾分眞面目に計畫せられた憲政擁護の運動が陰密に阿睹物を握つて、忽ち煽動的破壊運動と變性したのは、世人の注意を要すべき一大轉機であつたのである。

桂内閣と政國兩黨の對戰

是に於いて桂内閣と政國兩黨の對戰は、二月五日以來益々猛烈の度を加

へた、停會滿期の十日には白薔薇組なる議員團が出来、多数の群衆に日當を
與れて雇ひこみ、白薔薇を佩びざる議員等の登院を妨害し、見當り次第打
ち撲らしむると云ふ陰謀が企畫せられた、是が抑も焼打の前提ともなつた
物ぢや、國民黨の或る一人が、此の立憲政治の下に特別に徽章を製し、之を
附せざるもの、行動言論を檢束し、乃至其の身體を危害せんとするが如きは、
非立憲的蠻行の甚だしき物ぢやと云ふと、犬養は开様な事を言ふと撲
られるぞと言ふた、是に至つて憲政擁護團と暴民の間には、一絲の氣脈が
通じてゐたのは明白ぢや、愈十日の午後に至れば、國民、報知、やまと、二
六、都、五新聞の焼打と來た、是は皆豫定計劃の遂行で、決して突發的のも
のではない、時の川上警視總監が、憲政擁護會の面々に向ひ、憲政擁護團は

憲政破壞團なりと斷言したのは、忌憚なく其の急所を衝いた言ぢや、其の
翌日が神田の大火、續いて京都、大阪、神戸、其の他の方面へ既定方略の飛
火を飛ばした、希觀の憲政破壞の沙汰ぢや、是より先き桂公は時局に對す
る圓滿解決の道を講じ、内閣總辭職の英斷に出た。

内閣總辭職の英斷

然し此の段取に至るまでも、種々の芝居が隱密に演ぜられたのぢや、
即ち政友會では解散を恐れて裏口から桂公に妥協を申込んだ、又外相加藤
高明男は桂、西園寺の間に投じて公侯の會見を計畫した、公侯の會見は實
現せられた、其の席上、桂公は西園寺侯に向ひ、政友會では既に内閣不信
任案を提出した以上、貴殿に於いて跡引受の覺悟が御座らうと信ず、如何

と云ふと、西園寺侯曰く否其の覺悟は御座らぬ、桂公然らば不信任案の撤回を請ひたい、西園寺侯其れも今となつては困難でゐる、桂公其れでは閣下は時局を無政府状態に置かるゝものぢやと突こんだので、西園寺侯窮迫の餘り、外國の事例を引いて、大詔煥發の至當なるを諷したので、早速御沙汰書降下となつたのであるが、然るに侯は其の上猶ほも時局收拾に奏功しなかつた結果、政友會總裁の辭職、政界退引の末路となつた始末である。

權兵衛伯の出馬

權兵衛伯の出馬と云ふ火事泥的事件は正に此の狂瀾怒濤の眞最中に起つたのである、實は九日の議會と曰ふものは、西園寺侯の御沙汰拜受の結果として、不信任案撤回と云ふ段取となつて、事勿れで濟む手筈であつたが

眞先に撤回に反對したのが犬養ぢや、犬養は御沙汰書降下の件を以て桂公の責任に歸し、西園寺侯には其の責なしと云ふ御都合主義の理論を立て、他面政友會の某策士と競争して共に海軍省の一室に駆込んで山本伯引出に運動した跡がある、又松方侯と伴の幸次郎とは川崎造船所の救済上、薩派勢力の復活上、山本をして自由選意の行動を取らしむる必要がある、彼是の意味を兼ねて山本伯は出馬したのぢや、即ち彼は一方西園寺侯を見て其の無責任を難詰し、他方桂公に引責辭職を迫つたものである、事局一轉、大命山本伯に下ると與に、憲政擁護、閥族打破が忽ち戟を仆にして憲政打破、閥族擁護と化けの皮を剝脱した、政友會の獵權黨者たり、犬養一派の大臣病患者たる本來の面目を遺憾なく發揮したのぢや、而して政友

會が御沙汰書を反古にして不信任案非撤回の舉に出たのは、議會を解散せぬことを桂公が諷證した結果と聞くに至つては、政治家の心理ほど、解剖して見て、淺ましいものはない哩。

山本内閣の組織難

さて權兵衛内閣組織の一段になつて來ると、事は意外に面倒であつて、要するに政國兩黨の策士連が攻守同盟を結んで、山本伯を看板的に總理に僱ふ積であつた、所が相手は怪傑山本權兵衛、オイソレと安くは卸さない貴様等政友會連は自己の總裁を見殺にした結果、壇の浦の西園寺まで葬式の御供するより途のない者ぢや、此の火急の場合を救つて呉れと願つたから出馬した己に、種々の條件や注文を持ちこんで容れなければ絶縁するな

ど、勝手な熱を吹くでない、内閣組織の本命は己が受けてをる、絶縁は己の方からすることぢやぞと、此の山本の逆襲の一喝に、政友會はグツト參て合掌百拜。

國民黨入閣の死物狂の運動

此の競合眞最中に、國民黨入閣の熱狂せる運動が初つたものぢや、即ち二月十六七日頃の問題は、山本總理以下陸海軍大臣は、政黨員でなくとも可うムると云ふことになつた、國民黨は何ても彼でも自黨から二名の大出さねばならぬと畫策してゐたので、政黨内閣てふ理屈よりも、入閣てふ實際が大事とあつて、外務大臣も山本伯の方で非政黨員と云ふ事になれば、其れも此の場合異論を曰はぬと、時節柄大負に負けて出た、同時に既に犬養

は殘留黨の所謂天下の國士、志士に向つて、或は秘書官、或は局長或は縣知事の内約をして、一黨の人心を鼓舞するに勉めて居た、殘留黨は皆衷心に踴躍し、那れも是れも取らぬ狸の皮算用に夢中である、其の中には又、國家の爲に犬養を入閣せしめて、僕は其の秘書官になる見込ちやと、爲つた様な電報を打つて、期待が外れて面目を潰した國士もあつた、然るに犬養は危険だとか、果ては焼打に關係があるとか、群衆を煽動したとか、種々の故障が一方から出て来る同時に、他方からは有形無形に敬遠主義の敬意を表せられたとか、政治家の最も忌むべきものを着腹したとか云ふ様なことで、犬養入閣の必死の運動も失敗に歸し、犬養の相棒たる尾崎愕堂先生も、例の不敬演説の祟りで、これも同じく失敗に鼻を着けた、御兩君とも

實にお目出度くない面の皮さ。

政友俱樂部の出現

此の失敗の結果が政友俱樂部の組織となつて、一時天下に謳たはれ二十六硬派とあつた國士志士連が政友會から脱黨した、此等の連中は會内でも議論家に屬するが、政友會は由來盲從主義の沒議論黨に外ならぬので、此等の徒輩を竹越三又を筆頭に、脱黨の美名を假して一掃的に除名した、其の内に岡崎が居る譯は如何と云ふに、尾崎も一寸一人では出悪い譯もあり犬養からは分裂した國民黨を維持するには大臣の椅子を請合ふて呉れた岡崎に、脱黨の上一肌抜いで貰ひたいと云ふ義理の柵に搦まれて、表面は情誼の關係と稱し、裏面は政友俱樂部と國民黨を操縦して、政友會の左右兩

翼に引付け、山本内閣翊賛に歩趨を調へしむる意味合から、畢竟政友倶楽部の目附役として原の命を奉じて出たのであつて、政友倶楽部を純謀反黨でなく、政友會の支店の關係に保留したのは岡崎の牽制運動の效果であつた、處が其の間に山本内閣の顔觸も發表せられて、原、松田、元田の面々はマンマと大臣の列に参加し、犬養尾崎は遂に最後の落第と、事は決着に及んだので兩人も今はどばかり政友會と絶縁して憲政擁護に舞ひ戻つた、同時に岡崎其人も義理も役目も濟んだとあつて、是も議會閉會後早々に脱會して、政友會に舞ひ戻つた譯ぢや、さて又落第者の二人は政友會と潔く絶縁はしたもので、切つても切れぬは川崎造船所と山本伯との關係ぢや、惡縁か腐れ縁か、山本内閣に反對することが出來ないで、部下の不信任案の旗幟を翻した。

不可思議なる嚴正中立

抑も犬養尾崎が一國內の政争に参加した反對黨の本分としては、山本内閣に反對するのが當然である、然らずんば反對黨に降服して賛成するのが自然である、嚴正中立とは何等の無意義ぞ、桂公の政黨組織に對してすら其の誠意を拒絶して不信任決議案を提出する勇氣を示した犬養尾崎は何を苦んで、政黨には加入せぬ政黨は操縦すると公言した、而も薩派閥族の巨頭でもある山本伯の内閣に不信任案の提出が出來ぬと云ふか、曰はく是れ

には仕たくも出来ない切ない裏面の事情がある、其の事情は讀者の既に先刻御推量の事と信ずる、此内面の餘儀なさに搦られて口を鉗し、唯一片形式的の質問演説に兎に角表面を塗過したのである。

閥族擁護、憲政打破

是に於いてか憲政擁護、閥族打破の運動は、憲政打破、閥族擁護に轉じて居る、瓢箪から駒が出たのか、誠から嘘が出たのか、根つから譯か分らない、諺に犬骨を折つて鷹の餌食と云ふことがあるが、山本伯を引出して大臣にならうと云ふ大臣病患者の先生、アア好く引出した山本伯は、政友會に搔つサラはれ、大臣には成り損なつて意外な憲政の神様となつて、是も好し好し、之を東隅に失つて之を桑榆に收めたと云ふ心にもない疲我慢を張るのぢや。

大正第一次政變の結末

乃で結論は箇様である、桂公の新政黨組織に對して私黨朋黨を呼はつた政友會は、自身が剝出しに薩閥と苟合して、閥族擁護の私黨である、朋黨であることを、遺憾もなく暴露したのは、寧ろ無責任な獵權黨と謂ふても可からう、犬養一派は不幸入閣運動に蹴られて、天幸憲政擁護に舞ひ戻る餘地を與へられた爲、盲目なる群衆心理の上に、表面上の終始一貫を表装し得て、兎も角も憲政擁護の神様となり濟ました、立派な政界の僞善者である、此の際却つて閥族私黨の歴史を脱却し、公明正大な主義に政策に、理論的一貫を實證したのは、唯獨り桂公と其の黨與あるのみと云ふ結果に了

つた、此の政變に乗じて、最も其の貪慾を逞うして、其の目的を遂げ得たのは獨り川崎造船所である、所謂金權政治の發端を爲したものは、獨り川崎造船所であると云ふことを何人も忘れてはならない、大正政變の裏面の真相は、先づ雑誌の如きものであるが、猶ほ終に餘論の意味にして、之に關する後藤男の氣焰と、原敬の斷案と、岡崎の批評とを紹介し、最後に新政黨組織に關する桂公の告白を掲載して、讀者の參考に供して置く。

後藤男の觀測

大正の政變の真相を後藤男は箇様に言ふてをる、「政友會は西園寺の代りに山本を怎樣の箇様にと云ふのだが、甘く世間體を胡麻化しとるのぢや、山本は政友會に向つては、君等でなければならぬ様な茶羅鉢を言つてを

るが一方には官僚派の山縣系と握手してをるではないか、山本が何故彼の際に飛び出したかと云ふと、薩派十六年の頽勢を盛り廻さうと云ふのである、松方も息子達が薩派の天下で明年の大典を行つて、親仁を公爵に爲よう云ふので運動したのである、川崎造船所が是非山本に出て貰はなければ困ると云ふのである、ソレは怎樣云ふ譯かと云へば、室蘭製鋼所とアイムストロング會社の關係である、アイムストロング會社は山本に豫ての御約束(軍艦引請の事)を實行して貰ひたい、西園寺にも約束済でござると曰ふて督促に及んだのである、其の手紙は吾輩もチャンと見てをる、是れが政變の真相だて、猶ほ注意迄言つて置くが、犬養だつて山本に關係のあるのは公然の秘密だて云々、之を聞いた山本伯や松方侯や川崎造船所は、後

藤男に向つて採消運動を迫つたが、後藤男が承知しなかつたと云ふ事は、亦國民と共に記憶して置かなければならぬ事ぢや。

原敬の斷案と岡崎の批評

原は内務大臣となつた曉、這般の政變に關して曰はく、若し無遠慮に一切の秘密を暴露すれば、當今の政治家の二三者を、社會上から驅逐する結果を生ずべき故、氣の毒だから沈黙してをる、他日閑地にも就いたら、此の真相を書いて見たい云々と、二三の大政治家とは云ふ迄もなく犬養尾崎ぢや、次に岡崎は四海波收つた今日語つて曰はく、犬養尾崎を政界から驅逐するのが氣の毒だから、自分等が盡力して遣つて、憲政擁護の神様に祭りこんだ處が、神様になつた今日此頃、再び人間に返りたい、人間が戀

しいと言つてをると、呵々と大笑して、最後に憲政擁護、閥族打破では内閣は取れません、茶番狂言では大臣には爲れません、やつぱり國家を救ふだけの政策が必要でございませうと言つた、三人者の片言を以てしても政變の真相の一斑を解釋することが出来るではないか。

桂公の欺かざる告白

最後に桂公の新政黨組織の決心を紹介することにする、今日猶ほ新政黨を官僚黨と譏誣して得々たる政客や新聞記者があるけれど、官僚黨なるものは此の外に存在してをる、即ち山縣公の率ゆる閥族私黨朋黨の類である薩派の連中もやはり此の私黨朋黨の内に寄生蟲となつてゐる官僚黨ぢや、此の官僚黨と絶縁したものが桂公ぢや、今でも桂公の新政黨を破壊しよう

としてをるのは山縣系の官僚派である、山縣公の直參平田子が七月上旬桂公を訪問したと云ふ事實がある、其の際平田子は公に勸むるに黨界の繁劇を去りて、閑地に就いて静養するの可なることを以てせしに、公は斷然之を斥け、若し大勳位公爵の現位地を以てして、政黨組織の事が不可ならば勳位爵祿を返上し、單純なる一平民に降つて活動せんも、又辭する所に非すと云つた、此の事たるや憲政史上の一大事實として、國民の永久記憶すべきものであるから、更に詳細に記載し置かうと思ふ、即ち桂公が陛下御保養の地に晏臥するは畏れ多しとて、居を鎌倉に轉する一日前の事であつた、平田子は葉山の別莊を訪ねて親しく公を見て曰く、「公の病太だ輕しと云ふべからず、更に黨首としての心勞を重ぬるに於いては、恐らくは

恢復の期を遅くすべし、畏くも至尊深く之を軫念あらせ給ひ、桂をして身を閑地に置かしめよとの御詔なり、公宜しく熟圖する所あれ」と説き出した、其の時桂公は襟を正うし、決然として答へて曰く、「聖慮誠に忝し、感佩何ぞ堪へむ、唯政黨の組織に至つては是れ予が畢生の事業にして、最後の奉公と信する所、死すとも之を擲つ能はず、元來予が政黨組織の決意は素より一朝一夕の事に非ずして、多年の經驗に照し、深く感悟したる結果に出づ、之が實行に先ち心思を盡すこと既に淺しとせず、願みれば昨年の二月なりき、先帝陛下猶ほ御健在にましまし、時、予は闕下に伏奏して申す様、寶算無窮、今にして此の言を發するは頗ぶる不祥に類すれども、陛下百載の後、猶ほ皇基をして永しへに安固ならしめんには、猶一段の工

夫を要すと思ひ奉る、明治の元勳も次第に凋落し、一旦大事あるに際しても、能く獻替の任に膺る者、其の人漸く乏しくなりたれば、將來は政治の中心勢力を失ひ、託するに國事を以てせんとして、御取捨に迷はせたまふの時期なしと謂ふべからず、如何にして此の缺陷を補ふべきやを案するに陛下既に憲法を下し給ひて、議會を召集したまふ今日に於いては政黨の力に倚賴せらるゝの眞に止む可らざるを想ふ、冀くば臣が晩年の御奉公として幸に政黨改造の事業を試み、憲政の安固なる發達に資せしめ給はんことを、臣年既に六十七、今後政界の事に膺る、恐くは十年を超える能はず、眞に能く活動し得べきは近き五六年に過ぎざるやも測り知るべからず、幸に聖鑑を経て奉公の事業に従ふを得ば臣の慶福之に過ぎず」と、先帝陛下は

予が微衷を嘉納あらせ給ひ、「試みよ」との御誼ありしが故に予が勇氣は百倍し、先づ其の準備として歐米の政況視察に赴きし次第なり、不幸にして中途先帝の登遐に逢ひ、無限の痛恨を抱ひて倉惶歸國するや、其の後の轉變は貴下の詳知せらるゝ如し、予豈に一身の苟安を求めて、閑地に退くを欲すべけんや、勸慮は誠に畏れれども奉公の大事只之を以て重しと爲す、今上陛下臣の爲に勸慮を垂れらるゝ事茲に三度、義として違背し奉る可きに非ざるも、幸に臣が志を嘉納し給はらん、若し現爵の儘にして黨事に従ふの不可ならば臣は退いて一平民となる亦決して躊躇する所に非ず、陛下亦必ず臣が此志を諒として、猶ほ臣をして黨事を棄よとは仰せ下さるまじ臣に在りては是れ最後の御奉公なり」と、之を聞きたる平田子は默然とし

て去り、桂公は是より決心の色眉目に輝いたと云ふ、是れが桂公の欺かざる告白である。

此の桂公の告白を讀んで尙ほ桂公の心事を疑ひ誠意なしと云ふものあらば、**开**は單純なる感情に支配さるゝ、**女性的政治家**でなければ、**常識**を失つた**瘋癲白痴**の徒輩である、**到底度すべからざる味者**であると**斷言**しなければならぬ。(大正二年九月)

第二章 大正第二次政變の裏面

大正第一次政變の真相

大正第一次の政變は、表面討閥興民と標榜して裏面は川崎造船所、室蘭の製鋼所の破産救済の爲、軍艦兵器の粗製濫造を命せんとする窮策の實行に外ならなかつた、斯くて薩摩財閥が數十萬金の軍資を提供したる結果、忽ち山本伯の暗中飛躍となり、政友會の大活動となり、國民黨の大飛躍となつた、同時に眞面目な爲政家は、山縣系の長閥と絶縁して國民に降つた桂公の誠意を諒として、其の新政黨組織に参畫したが、不幸桂公の失脚を機として、海賊然と出現した山本伯が、内閣の椅子に居直つたのは驚くべ

き悪夢であつた。

薩摩財閥の隠謀

此の内閣の與黨等は、萬一手品の種が見ねると、立場を失ふの虞があるので、先づ新政黨の後見役たる、大隈伯を暴壓して沈黙せしめ、他面新政黨に對しては、感情一偏的に官僚黨の汚名を被せて、無二無三に讒誣の言を浴せかけた、其の結果世間體好く憲政の神様が出來、陪食の神様が出來、二打以上の國士が出來、海賊の親分株までも出來た、而して此の手品師たるものが誰あらう川崎造船所であつた。

大隈伯を取り遁した

何等の意味から出たもの歟、見物したいとも言はないものに、川崎造船

所を視察して貰ひたしと頼んだ者は松方幸次郎で、頼まれた者が大隈伯である、伯は關西旅行を終へて神戸に入るや、川崎の御用旅館と申す、兵庫の常盤華壇へと案内せられて、翌日右の造船所を視た譯ぢやが、何處も憂の槌音ばかりで、一向に奥深きことも分らない、其處で數理に明るき伯の事として、早速會社の資本勘定と損益勘定の統計表を見せて呉れと言はれたので、松方は大に困つた、然し伯は、三菱の造船所の表も貰ふて居るから、何卒出して貰ひたいとあつたので、澁々提供したと云ふことぢや、所が宿泊料の支拂の一段になると、伯をば現代收賄の張本たる海軍將官待遇とあつて、常盤の女將は伯の家人に向つて、諸支拂御祝儀は造船所の方から頂戴致しましたと申し出たので、家人驚いて伯に告ぐる、伯は一向御

馳走になる理由が無いと、宿泊料を支拂はせ、祝儀を取らせて常盤を出た、大隈伯は危い機会に虎口を遁がれて、言論の自由を全ふし得たのは此の時ちや、松方幸次郎は當代の怪漢であるが、大隈伯懐柔には見事に失敗したのである。

國民黨の御迷論

大正第二次の政變の真相は軍艦を引受けさす歟、さゝぬ歟と云ふモサクサちや、さすと云ふのが政友會、さゝずに蹴ねたのが同志會と中正會、從來の分は約束済だから引受さそうと云ふ間の子説が國民黨の御迷論、此の御迷論が、何處を突かれて出たものかが昨今世間の疑問ちや。

案外脆い山本内閣

收賄の元兇と謂はるゝ山本伯は今少し推の強い政治家かと世間をして思はしめたが、存外脆くも落城した、貴族院より不信任的決議案を受けながら、何等の辯明を與へず、成立すべき豫算案に、見すゝ不成立の幕を落されて内閣は瓦解し、川崎造船所、室蘭製鋼所は意外の打撃を受くるに終つた、因果は靦面此の通りちや。

武士道の蒸發

山本伯はシーメンス事件の劈頭、武士道の人格論を擧げて議會に臨んで、貴族院の村田翁に散々其の人格を罵倒せられ、辭職勧告まで受けながら、之に向つて辯明の一語もなく、決闘を申込む勇氣もなかつた、山本伯の五體から武士道が何時の間にか蒸發して了つた、其の他新聞に雑誌に演説に

有らゆる悪名を受けながら、これに應戦するでもなく、又法律上の正當なる手續に依りて、名譽回復の行動をも取らなかつた所を見ると、山本伯の人格程度が猜知せられて餘りあるのぢや。

不徳漢揃の内閣

憲法發布以來内閣も澤山續いた、然し山本内閣ほど不祥極まる内閣は恐らく空前絶後であらう、山本總理は「海軍腐敗の元兇」と呼ばれ、原内相は事實に於いての人権蹂躪者で、牧野外相は日本の外相か外國御傭の外相か判らず、大岡文相は教科書事件、日糖事件で醜聲を散し、文教の風上に置けない人物、揃ひも揃つた不徳漢の内閣である、殊に原内相が配下の警察が信用出来ずとあつて、三多摩の壯士を徵發して自己の身邊を警戒せし

め、剩へ輦轂の下に彼等の暴行を逞せしめて平然たるが如き、不祥の極と謂はなければならぬ。

議會の醜態暴露

議會の内容に立ち入つて見れば、少數黨の横暴と云ふこともあつたが、多數黨の横暴には比較にならぬ、未だ討論に入らずして討論終結の動議を提出したり、委員會には政友會の壯士が多數入場して居て、反對黨の議員を毆打したり、懷中を掏つたりしたなどは、前代未聞の狂言である、議會の神聖は何處に在る、更に營業税の討論中、議場紛擾の際投票函を踏んだものがあつたが、其の足跡が靴跡であつたのに對して、麻裏草履の綾部總兵衛君を懲罰に付して謝罪せしめた、藏原惟郭君が海軍腐敗密告の書狀を讀

み上ると、其の腐敗者の名前を讀めと強制し、其れを讀むと、今度は日附と發信人の名前を告白せよと迫り、藏原君が時機を待つとて承服しないと忽ち院議抵抗とあつて二週間の出席停止を申し附けた、處が藏原指摘の松尾造船總監は、何時の間にか獄中の人となつて居るので、藏原君の指摘を疑つた多數黨も、茲に至つて顔色なし。

心にもなき院議尊重

貴族院の海軍擴張案否決に對し、衆議院に於いては政友會は申すも愚か中正會、國民黨の面々に至るまでが、院議尊重一點張で、貴族院を屈服せしめようとかつた、此の際獨り同志會のみ、貴族院案に同意を表した、由來貴族院として、國民の意志を代表せざる衆議院の議決に對して、貴族

院の特權を行使し、之を削除するは當然のこと、是れなればこそ貴族院の存在の必要があるではないか、中正會や國民黨が、自ら國民の意志を代表せざる院議なるを自認しつゝ、衆議院案を院議尊重の美名の下に決議して、却つて國民の意志を代表したる貴族院案を感謝しつゝ、排斥したのは、其れ自身に於いて既に矛盾してをるのではないか、院議尊重は其れとして、此の矛盾をば如何様に説明するか、衷心院議通りに可決しては困ると謂ひつゝ、院議尊重とは何の事か、此の際理論的終始一貫の態度を取つた同志會の態度こそ、實に模範的でなければならぬ。

憲政の神の正體

彈劾上奏案討議の際國民黨の犬養木堂が山本伯を攻撃した一段は可なり、

であつたが、他の彈劾の目的たる原内相には一矢を注がず、顧みて貴族院攻撃に他を言つたのは、政友會に走るの魂膽で「頭隠して尻を出す」の俚言即然で御座る哩。

停會詔勅の露出

如何に議會が紛擾しても、不敬の所爲は決して許さぬ、然るに議會停會の詔勅が從來紫紙紗に包まれて、勿體なく議長の手に渡さるゝの例なるに恰も普通の公文書なるかの如く、露出のまゝ書記官の手から手に議長に渡されたるに至つては、帝國議會あつて以來未曾有の不敬と謂はねばならぬ。

内閣交迭の正道

停會——總辭職——元老の小田原評定——後繼内閣の選定——お鉢が果

して誰に廻るか、伊東子か、清浦子か、平田子か、但しは原政友會なる乎、加藤同志會なる乎、故桂公は曰く、後繼内閣には反對黨の首領を御召しに
なる制定が立ては、憲政濟美の目的は達せらるゝと、其處ぢやて、然うなら
なければならぬのである。(大正三年三月)

第三章 大隈内閣組織の真相

海軍收賄問題と山本伯

武士道、人格論を唱へて海軍收賄問題に對する衆議院の沸騰を抑壓し掛つた豪岸不屈の山本伯も、貴族院に於いて村田水産翁の猛烈なる突貫に撃沈せられ、豫算は不成立に歸し、輿論の非難攻撃は轉た激し昂りて、最早一日の嚙附を許さざるに至りし結果、已むなく千萬思ひ切つて辭表奉呈の勇舉に出た。

翌日某の大官が要件を以て伯を訪問した處、伯は未だ寒暄をも叙しあへず、明治二十七八年戦役以來の海軍の機能を吹き立て、約一時間半に亘

る大氣焔を吐いたので、某大官は餘りに脱線の甚しきに喫驚し、僅に五分間で済む用事に一時間半抑留せられた御返禮とあつて、主人の伯に時節柄最も有益な忠告を呈した、其の言に曰はく、今日天下公衆の耳目の疑惑は、外ならぬ閣下御自身の財産自體に聚中して居ることは、閣下も御承知の事と存する、此の天下の疑惑を氷解漸滅する方法として、一面には閣下攻撃の新聞雜誌を相手取つて非毀の告訴を起し、名譽損害の賠償を御要求あつては如何、又他面には閣下の財産自體を開放し、朝野に亘つて名望、信用、權勢を兼備せる三五名の調査委員を指命し、此等の人々に調査を委任して、以て閣下の清廉潔白なりし所以を御證明になつては如何と、然るに兎角良薬は口に苦く、諫言は耳に逆らふ習とあつて、此の忠告を耳にしたる

山本伯は今迄海軍の機能を吹き立たる萬丈の氣焔は頓に消滅し、悄然として答へて曰はく、實に御尤の御忠告である、が折角それ迄手を盡して身許の證明をした處で、一旦受けた世間の疑惑を解く譯にも行くまい、結局徒勞に歸するものと信ずるから、左様の辯明めいた事は仕たくなないと打切つたと云ふ話である、權兵衛伯が自己を自白して自滅するやうな正直者でないことは、是れで能く判つてをる。乙

意外なる山縣公の隈伯推薦

山本内閣總辭職の結果、第一期元老會議に於いて、消息通の未だ及知せざる所、新聞紙の曾て報道せざる所、吾人の最も聽くを意外とするところは山縣公が開會劈頭時局の收拾者として大隈伯を推薦したと云ふ一事である

る、此は實に山縣系方面より出でたる消息で、之を打消さんとするれば有らゆる既往の風説を打ち消さねばならぬまで、出處確實な報道ちや、而て又山縣公が何故に多年の政敵たる大隈伯推薦の勇舉に出たかと云ふに、此れ迄世論が同公を以て度すべからざる超然内閣主義者と見て居た誤解から、先解く必要があると思ふ、山縣公は既に議會以來二回まで内閣組織の局に當つた政治家、政黨操縦に當つて苦い經驗を嘗めて來た一人である、假令政黨内閣其物には反對するにしても、政黨の同情と基礎とを有せずして、内閣組織の不可能な事は十分判つてをる筈である、況んや現下政變の真相は、貴衆兩院の反對黨が連合結束反對の上政薩聯合内閣を破潰したと云ふ譯であるから、其の論理的結果として、兩院の反對黨が結束して聯合内閣を組

織すべきは自明の理である、而して此の兩院の勢力を結合して聯合内閣を組織し得る有資格者は、在朝在野を物色して、獨り大隈伯あるのみにて、隈伯出でずんば蒼生を如何せんとは、多年叫ばれた國民暗黙の聲である、山縣公が實際大隈伯を推薦したとすれば、其は外ならず此の自明の理と國民の聲とが、山縣公の胸に響いたと云ふことである、隻足既に棺桶に掛つた老人の肚の底から、是を最後の御奉公として、此れほどの公平無私の精神は湧き出づべき筈、然もなくとも五十年間、國民の怨敵で通した生涯の終を飭るに此の最後の美譽を以てし、位牌に面目を施したいと云ふ位の考は、當然起るべき筈である、其の理由は兎に角に、山縣公が大隈伯を推薦したのは事實である、山縣公の罪亡ばしぢや。

松方侯の隈伯反對

所で松方侯には又松方侯の魂膽がある、其の魂膽は山縣公の隈伯推薦が氣に喰はないので反對した、而かも侯の隈伯反對ぶりが極力毒舌惡罵を加へて發揮せられたと申すのである、山縣公も松方老の此の氣焰に面喰ひ、然らば貴老推薦せられよとあつて、松方侯は先づ其の魂膽の瀕踏を爲すべく、門閥家と云ふ理由の下に徳川公を推薦し、徳川公にして辭すれば可し、起てば起つで其れも可し、之を政友會の總裁の位置に薦めて、政友會内閣を組織せしむれば自分の目的は達すとあつて、二途掛けて推薦した、松方侯の魂膽を看破したる徳川公は、是れ我を鯁節にするものなりと憤慨して推薦を辭した、恰も豫期した所に來たので、侯は愈本心の推薦と出掛けた、

徳川公は單に輿論の向背をトする爲の風信機として試に推薦したるに過ぎなかつた、然し之が爲に松方侯が公器を假りて國民を愚弄したと云ふ天下の非難を免るゝことは出来ぬ、是に於いてか松方侯本心の推薦となつて、清浦子出現の一幕となつた。

清浦子の出現

是れを山縣公の推薦と諸新聞紙が報道したのは、探訪不行届の結果、清浦子が舊と山縣公の乾兒であつた縁故を辿つた想像説より過ぎなかつた、而て又松方侯が清浦子を推薦したのは一面は是を以て前記の關係を利用して山縣公の歡心を買ひ、他面には清浦子が曾て幫間と綽名された程、與し易き性格なるを利用し、之を政薩聯合の勢力の上に立て、巧に之を操縦し、

己の魂膽を實現せしめんの計略に出たのである、得意出現の清浦子は海軍との交渉は松方侯に、陸軍との交渉をば山縣公に依頼した、松方侯は勿論既定の快諾を與へたるに引き代へ、山縣公は意外に云はなかつた、山縣公は本來清浦出現に反對であつた、清浦子は一回兩回長時間椿山莊に山縣公に泣き付いた、山縣公は儼然として取り合はぬ、お前などの出るべき時局でない、と唯一言に蹴ね付けて、跡は鼻で遇つて居た、然し切なき依頼とあつて陸軍との交渉は兎も角もと答へたが、同方面の交渉が實際甚だ干渉に附せられて居たのは、凭る裏面の理由に出たのぢや、内閣組織の幹旋に際して、自家の乾兒を推薦することは、思慮細縝なる公の常に避くる所であつた、昨年の元老會議に寺内伯を出さなかつたのを見ても判る、公が

此の際清浦子に興しなかつたのも、確かに事實とすべき理由がある、同子の内閣組織の失敗も、公の表面好意的中立、裏面厳正中立の結果が與つて多きに居る。

清浦子の遁竄

清浦子の出現より内閣組織失敗に至るまでに、種々の段取がある、大命を拜して大臣の役割に進むの際、子は衆議院書記官長林田龜太郎を參謀に延いた、林田の建策に依る初期の計畫に曰はく、今次權兵衛内閣を仆したのは衆議院の三派と貴族院の三派である、故に兩々三派より每一名の候補者を取り、之をば内閣幹部として、餘は清浦自身の腰金着にて可ならんと、然るに清浦子は何と思つたのか、此の合理的の建策を排斥して、壯士出頭

の蠻骨で、現に東京府知事とか云つた宗像政を參謀に、熊本内閣の組織に着手し、超然内閣を標榜したので、幾分か好意を輸し、色氣を示して居た政友會は、忽ち絶對反對の態度を決した、次いで司法大臣を物色して、檢舉の峻辣に其の名を得たる松室前法相を得た爲に、忽ち海軍部内の錯愕と反感とを買ひ、其のストライキを喚起して、成るに垂んとした内閣組織は忽ちに頓挫し、清浦子の遁竄に終を告げた。

清浦子が海軍大臣の物色を齋藤海相に依頼したのは、海軍廓清の實行には不利益と認められたれど、清浦内閣成立の爲には已むを得ない事情であつた、猶又松方侯の後援を喚起する所以でもあつた、然れば海軍側でも清浦内閣の性質に就いては、松方方面からして先刻承知の事でもあるから、

齋藤海相も其の相談を快諾し、後任海相として加藤中將を推し、態々公電を發して佐世保鎮守府から召喚したほどであつた、然るに清浦子が海軍廓清に對する輿論の趨勢に鑑みて、俄に檢舉法相を選任するに至つたので海軍部内は愕然として色を失ひ、山本伯以下加藤中將を強要して、其の交渉を破棄せしめ、海軍のストライキを宣言せしむるに至つた、是に於いてか海軍對國民の一活劇は、到底避くべからざるものとなつた。

是に至つて「お前等の出る幕でない」と曰つた山縣公の忠告通り清浦子は世運の變轉と、自個の無實力と、政黨無しに内閣を組織することの絶對不可能なることを始めて自覺したと云ふ、若い經驗と高價なる失敗の下に、泣く泣く引き下つた譯ぢや。

松方侯自立の魂膽

清浦子遁竄の後、都下新聞紙は一齊松方侯起つとの風聞を傳へた、實際左様であつたのである、前條所謂松方侯の魂膽とはイザと云へば自ら立つと云ふ此の魂膽ぢや、理由は最早云ふまでもない、薩摩財閥の親分として、多大の資本を投下した川崎造船所、室蘭製鋼所が豫算不成立の爲、大打撃を蒙むり、殊に倅幸次郎主宰の川崎造船所は、全く作業を休止して、時々刻々破産の運命に接近して行く、年寄の冷水と曰はゞ曰へ、最早恥も慮外も願る追なき場合に立ち到つてをる、去年の今日業に既に起ちかけたとき譯も分らず引留めし倅幸次郎、今年の今日は兩手を執つて引き起すと云ふ急場となつた、然し此れ程自分が奮起しても、誰も呼び出して呉れるもの

がない、山縣老は無論のこと、乃公の賛成係を務めて来て呉れた大山老さへ此ればかりには賛成の聲を掛けて呉れないので、如何とも仕方がない、乃で何分立つに立たれず、身代として西園寺侯呼出と出かけた次第や、同時に元老會議は第二期に移つた。

井上侯の歸京と内田山邸會合

斯の如く、第一期元老會議は山縣、松方、大山の三元老會議で、松方侯は大山と云ふ賛成係を従がへて居たので、勝手の熱を吹いて居た、山縣公は如何に之に反對しても最後の多數決に於いて敗亡するので、之に對するには先づ數に於いて互角の陣立を備ふるの必要があるので、至急興津別莊靜養中の井上侯の歸京を促した、内田山井上邸の四元老會議席上、山縣公

は大隈伯の推薦が松方侯の排斥を喰つたと云ふので、沈黙して居る、松方侯は從來先手の行懸り上、先づ最初の發言者であつた、侯は現下の政局は衆議院に多數黨を擁する政友會に、内閣組織を命ずる外に發展の途はない、結局西園寺侯の再起を煩はすを捷徑とすと云ふ我田引水説を立てた、之に對して井上侯は開口一番、海軍の失體と國防の缺陷を暴露して、上下兩院の不信的彈劾に仆れたものが、政薩聯合内閣たる以上は、此際時局の收拾者は政薩以外に求むべきが至當であると、先づ松方侯の機鋒を挫き、而る後滔々と維新當時所謂今日の元老等が如何に輿論の大勢に乗じて回天の事業を成功したものであつたかを説いて、今次の時局の收拾も、此國民的輿論の大勢に掉して往く外はない、而て此の國民的輿論を利用し時局を

收拾する者は、我々元老中の比較的強壯な大隈伯を煩はす外はない、大隈伯が最適任者と云ふことは、衆論の歸向する所である、氣焔宛ながら虹の如く、松方侯に向つて、侯が大隈伯を排斥せらるゝには何等かの私心があるやに聞いて、甚だ面白からず感ずる、此の際寧ろ同伯を擧げて公平無私の態度を天下に示さるゝ方得策ならんと、無遠慮に言ひ放つて、松方侯をして一言も無からしめた、大山公も「尤だ」と謂はざるを得なかつた、此くて此の一回の會議にて、隈伯推薦の儀は略ぼ一決した、然し此の四月八日の井上邸の會議は、召命に依る推薦會議に非ずして、其の下地會議に外ならぬとあつて、腹の中煮ね切れぬ松方侯は獨斷西園寺侯出慮催促の密電を發した。

西園寺侯の出慮難

西園寺侯は昨年の違勅事件以來、政界の亡者として自ら居た、違勅の惡名を附して侯を亡者にしたものは、政友會自身である、換言すれば政友會自身が總裁たる西園寺侯を殺したのである、政友會は西園寺總裁の引退と共に身首處を異にした譯ぢや、政友會の總裁復任運動なるものは、自分が切つた首を自分の胸に再び繼がうと云ふのである、然し西園寺侯は他の弱腰公卿と聊か異うて居るだけに、腹の蟲が承知をせぬ、我をして長くも國家の元首に對し違勅の責を負はしたものは貴様等ぢやと云ふてをる、政友會が幾度引出運動を試みても、侯は蹶ねて應じない、世論とても同然ぢや、昨年の政友會の妄動を憎めば憎むほど、西園寺侯の上に違勅問題を連想す

る、設令んば侯自身出盧せんと欲す共、世論が達勅總裁の出現を許さない、達勅問題の記憶が世間に斬新なる間は侯の出盧は不可能事である。

西園寺侯には二箇の附屬物がある、一は健康問題で、他は達勅問題である、侯は平日は健康で、政變の際、出盧の催促を受くる際には毎に病床に呻吟して居る、是れは實際の病氣よりも達勅の傷痕が痛み出すのちや、今次の政變當時にも、ヤハリ此の傷痕が痛み出した、其の兒分の秋元興朝子が引出運動を兼ねて、侯の健康状態を訪ねて入浴した時にも、實病三分虚病七分の容態であつた、此の傷が侯の致命傷！

西園寺侯が松方侯の密電を入手したのは此の虚病呻吟の際であつた、侯は勿論同時に出盧難の返電を發した、到底出られた義理ではない、是に至

つて松方侯の最後の斷念、大言伯推薦の評定となつた。

大隈伯推薦の會議

是れ即ち皇太后御危篤發表の翌日、十日の内田山邸の會議である、此の際井上老侯は、先づ大正劈頭の政變以來屢次時局を紛糾せしめたのは、元老の眼に時勢の推移、輿論の勢力を達觀するの明を缺いて居た罪であつた、今次の政變にも徳川公を推して拒絶せられ、清浦子をして超然内閣を組織せしめんとして失敗に歸し、更に新候補者を物色して交渉したるも、病に假託して出盧しないので、失敗に失敗を重ねてをるのは、果して誰の責であるか、然りとて此の際少壯政治家を起して政權を授けんか、益々時局の解決を困難ならしむるの虞あれば、今日の事唯元老總出にて國柄を握り、機

務に當る外に途なき場合に降到して居る、然かも四名の元老は孰れも頽齡老衰の餘、克く大任を完ふするものなき以上、大隈伯を推薦して四元老に代りて時局收拾の任に當らしむる外はないと、淀みなく陳説したるに、既に昨八日の侯の言もあり、三元老とも異議なく之に一決し、茲に隈伯の出廬と云ふ、國民期待の一幕が開かれた。

大隈隻脚伯の出廬

伯は四元老の同意を以て、若し大命降下の場合、必ず御請申上ぐることに勧誘せられて、言下に承諾を告げたと云ふ、或は熟考の餘裕を乞ふたとも傳へる、然しながら此の際伯の態度に聊か周障氣味があつたのは掩ふべからざる事實である、大隈伯が眞先に加藤男を呼んで、此の元老の交渉を

告げたるに答へて、男は堅く伯を戒めて此の際決して例の大風呂敷を擴げられてはならぬ、然らざれば跡で始末に困る混入物の割込ぬとも限らぬと忠告したと云ふに徴しても、此間の消息が察せらる、又今日出来上つた内閣員の顔觸を見ても證明が出来る、初め内閣組織引請の際、伯より元老に向つて、内閣組織は自分の勝手たるべく、四元老の容喙を受くべからざる事、又既に成立した内閣に對して、四元老は協力一致して可及的援助の實を擧ぐることを誓約せしめて置いたら安全であつたのである、然るに伯は聊か周章込んで、安請合をしたもので、イザ内閣組織となること、種々の氣兼や遠慮が差して、政黨内閣實現に對する輿論の期待に反し、貴族院より一木喜徳郎など云ふ、問題にも上つてをらぬ小官僚を引き入れて、三十年

來政黨界に功勞ある河野磐洲翁の如き先輩を、却つて落第せしむるやうな事をして、政友會に惡罵の材料を強か與へた。

政友會の惡罵

政友會内には磐州の政黨生涯を畏敬し、其の晩節の不遇に同情するものが多數之れあるとともに、救世内閣と待望せらるゝ大隈内閣に對し、好箇の惡罵の材料を得たと云ふので、欣喜雀躍してをるらしい、惡罵の材料とは何かと云ふに、一木文相は山縣の兒分だと云ふので、山縣が大隈に降参したのでなくて、大隈が山縣に降参したのぢや、長閑の復興ぢや、現内閣は官僚内閣ぢやなど、途方もない理窟を捏造し、之を振り翳し、地方遊説に出かけ、新内閣に對して可及的譏誣中傷を試みる積でをる。

然らば一般の輿論は如何と云ふに、一木文相に對して非難は仕ない、非難は仕ないが一種奇異の反感を抱いてをる、同時に河野磐洲翁に對して、多大の同情を表して居る、此の黨界の元老に、責めて一日なりとも大臣の椅子を與へて、而る後樞密院か然もなければ貴族院にも入れたいものとは不言不語の輿論である、所が磐洲翁自身に於いては、極めて見上げた人物で、此の千歳一遇と謂ふべきか、優曇華の花さく時節を待ち得たと云ふべきか、兎に角入閣の機會を眼前に見ながら、何等の入閣運動も仕ない、而已ならず自分の落選を憤慨せる少壯議員等を却つて慰撫して居ると云ふのが事實ぢや。

島田沼南の狂奔

然るに、之と好個の對照に、島田沼南の狂奔には、誰しも少からず當てられた、沼南老人は三十一議會に於ける、シーメンス事件の發言者、海軍收賄問題攻撃の急先鋒であつたには相違ない、其の三寸不爛の舌を揮ふて山本内閣を仆すに與つて、力ある一人たるには相違ない、然れども内閣は三寸の舌を以て仆すことは出来るが、三寸の舌を以て立つることは出来ない、沼南の論理に依れば、自分は前内閣を仆したものの、一人であるから、新内閣の一人たるを得ると云ふのであろう、所が世間は開様は卸さぬ、内閣員たるには内閣員相當の技倆と手腕と徳望とが必要である、大臣の資格は口よりも手、手よりも更に心に在る、雅量にある、徳望にある、沼南の明敏を以て、自ら反省したならば、自分が大臣の器歟、否歟は思半に過ぐべ

き筈、開様申せば沼南は、極めて充らぬ役廻りを勤めたものであると曰ふかも知れないが、然し何も大臣に就任して國務を處理するのみが、政治家の能事と限つたものでない、寧ろ政界の批評家として、所謂グレート、コムモンナーとして、終始一貫することも、實に一個の必要缺くべからざる天職である、此の方面に於いての沼南は實に獨歩の位置を占めてをる、其の器や瑚璉である、自ら其の能を省ずして漫に大臣の位置を覗ふのは、自ら己の長處を棄て、適々其の缺點を、遺憾なく暴露する所以である。

聞くが如くは大命大隈伯に降るの説傳はるや、沼南前曳附の腕車を早稲田邸に飛ばして、主人の伯に請謁し、開口一番、徳川公をして大命拜辭に出でしめたのは舊幕臣たる三郎自身の勸告なること、又海軍廓清に先鞭を

着けたるもの、新内閣に於いて海軍廓清の實を擧げ得んもの、三郎の外は
ないと云ふことで、自ら入閣の上伯の内閣組織を賛助したいと申し込んだ
ので、道が大風呂式の早稻田伯も此の自動的運動に喫驚仰天、答ふる言を
知らなかつたと云ふ話ぢや、此の入閣運動の喜劇は落選の悲劇に終を告げ
て、沼南自ら可惜面目玉を潰したのは自業自得とは申せ、如何にも御笑止
千萬で御座つた、此等の喜悲劇の最中、又々入閣熱狂希望者が今一人顯は
れた。

内務大臣熱望の木堂

大命を拜して歸邸した大隈伯が、眞先に招いたのは、實は犬養尾崎の兩
名であつた、伯の胸中には既に内閣組織の成算があつた、必ずしも兩名を

入れなければ成らないと云ふことは實際無かつたのであつた、然し表面三
派提携を策する爲め、又從來の關係上、一應大命拜受の實を告げて、其の
援助を求むるの必要があつたと云ふので兩名を召んだ、即ち伯は兩名に向
つて、諄々として現在政局の難況を説き、兩名が三十年來の伯の友人とし
て、此の際一劈の援助を與へんことを所望した、兩人は旨を領して退いた
而て暫くすると木堂は使者を以て内務大臣の椅子の注文に及んだ、伯は意
外の感に打たれて、無條件入閣ならば考へるがど、内相熱望を拒絶した、
此の際三浦將軍は屢次早稻田邸に出入して、犬養入閣運動に力めた、然れ
ども伯は斷じて無條件入閣以外承知しなかつた、木堂の大臣病も久しいも
のであるが、實は内務大臣病であつた事が判つた、前内閣の難局に瀕する

毎に木堂が幾度か政友會と提携せんとして、事志と違つたのは、現に原敬の占めて居る内務大臣の椅子を覗つた爲であつた、木堂は岡目からは如何にしても出来ない相談を屹度出來ると信するまで、己惚の強い痴漢である。と云ふことが判つた、同時に又如何ほど木堂が世間を瞞着して居たかと云ふ事も判つた、と云ふのは、大隈内閣の主義を賛し、其の成立を援助すならば、内務大臣になるとなるまいと、那方にしても出來ることぢや、内務大臣になれば大に助けることが出来るが、内務大臣に仕て呉れないから大に助けることが出来ぬと云ふ筈はないのぢや、然るに其の實内務大臣に仕て呉れないで、無條件入閣なら考へるなど、自分を侮辱した話であるから、入閣の出来ないと同時に、内閣援助の旗幟とても、何時怎樣變更する

か知れない、と云ふ様な態度に出るらしい、果して然らば、木堂の大臣病否内務大臣病は、既に膏盲の間に入つて度すべからざる宿痾であることが判る。

愕堂入閣の理由安に在る

次に愕堂入閣の理由は如何と云ふに、是れ亦甚だ不徹底で、何人も理解に苦む所である、下馬評に謂へる如く、多分テオドラ夫人が最も了解してをるのみであらう、勿論愕堂は沼南同様、海軍廓清の急先鋒であつたので司法大臣として其の言責を實行すると云ふことは聞いて居る、而して又沼南同様、三寸不爛の舌頭を以て前閣を仆した者の一人であるが、唯だ愕堂は沼南と異つて、天下の新聞記者連を操縦して多少の同情を聚めて居る、此

の一點に國務大臣たる器量は若干ある、然るに今日中正會の首領たる愕堂が、特に大隈内閣に入つた理由は何處に在るか、換言すれば中正會を代表し、其の會員を挈げて入閣したかど云ふと、開様でもない、愕堂が入閣すると同時に、中正會は分裂して、結局大隈内閣に對して自由行動を取ると云ふ決議をして居る處を見ると、愕堂の入閣は毫も三派連合の氣運を促進せず、却つて反對の結果を生じて居る。愕堂の入閣は往年大同團結を踏臺として、伊藤内閣に入閣した、後藤伯式の離れ業を踏襲して、中正會を甘く踏臺に用ひたものらしく、中正會こそ善い面の皮である、愕堂自身は大隈伯が自分の主張を容れて呉れたからと言ふて辯解して居る、然し彼の主張と云ふのは海軍廓清問題、若くは文官任用令再改正等であつて、大隈内

閣に於いては、既定の問題に外ならぬこのことである、畢竟するに愕堂は伯三十年來の友人だと云ふ美名の下に、大隈伯に誘拐せられたものである、別言すれば無條件降伏の入閣ぢや、一年前の政變に、堂々たる憲政擁護の神様であつた者が、現内閣の一件食大臣たる位置を得べく、無條件入閣の羞辱を甘んじたとは、吾人をして今非の感に禁へざらしめるのでないか、尙且君子の豹變と善意に視られて、與黨に唾棄せられない處を見ると愕堂は確かに幾分かの情力を有つて居る者と見ゆる。

理論の矛盾

昨年の政變に木堂も愕堂も、山本内閣に黙つて入れば入れたかも知れなかつた、然るに二人とも憲政擁護、閥族打破を絶叫して憲政擁護の神様と

なつたが爲に、然て入閣問題となると、政黨内閣でなければ、入閣が出来なくなつた、政友會の原敬は犬養尾崎に向ひ、憲政擁護閣族打破を唱へたものが、山本伯の薩閣内閣に仲間入りしては、君等の政黨の内閣論に對する立場があるまいと、皮肉の排斥を喰はした爲めに、主義上入閣が出来なくなり、愕堂も亦落伍して結局政友會を出たのである、此の政黨内閣論にして健在ならば、大隈伯の交渉に對し彼等が眞先に爲すべき答は、伯の内閣が政黨内閣であるか否でなければならぬ、肝心な此の問題を而て措いて或は内務大臣を所望して見たり、入閣口實に既定の問題を提出して、世間體を装つて見たり、結局無條件入閣を諾するとか諾せぬとか云ふが如き露骨醜怪なる喜劇悲劇を演ずるに至つては、平常の主張は何くに在るか、三

十年の名節は何くに在るか、昨年の憲政擁護の神様は何くに在るか、政黨内閣論者は抑も亦何くに在るか、大臣入閣の前には主義も主張も絲爪の皮と云ふ積乎。

冷靜に此等憲政の神の態度手段を見て居ると、昨年の政變には政黨内閣論を唱へた故に、内閣は取れながら、義理づくにも政友會の非政黨内閣に入る譯には往かない、然るに今年の政變には政黨内閣論を公然唱へなかつたから、大隈伯の非政黨内閣にも入るのちやと言て居る如くである、昨年の彼等は叫破の結果に自繩自縛の苦痛を嘗めたが、今年の彼等は沈黙の功で自由自在に入閣の幸機を得たと云ふ状態ちや、然らば則ち叫破するも彼一時、沈黙するも是一時、政黨内閣論も一年限り、跡は野となれ山とな

れ、入閣さへすれば可なりと云ふ結論に歸着して、在野政治家の心事の陋劣は、遺憾なく發揮せられたものと謂はなければならぬ、設令是れとても頑冥不靈の閥族の舉措に比すれば、尙且勝れりと曰はゞ謂へ、貴族院の手前もある、國民の手前もある、國民に唾棄せられたら損であるか得であるか、在野政治家の健全なる覺醒を要望せざるを得ぬのである。

大隈伯の立場

隈伯出でずんば蒼生を如何せんとなつた國民暗黙の聲に應じて、隈伯は出現した、然かも大隈内閣が出来て見ると、國民の期待には大分外れた顔觸である、一木喜徳郎の文部大臣、吉川重吉男の遞信大臣（是れは辭退となつて武富時敏氏となつた）と云へる如き、貴族院側が入閣候補に顯はれ

居た、是は抑も何人の推選か、大隈伯の組織意見果して如何、と云ふことが問題となるに至つた、是に於いて大伯伯自身から見た同伯の立場と云ふことを、研究する必要も亦あると思ふ、大隈伯は自家の内閣を綜合内閣と標榜して居り、綜合内閣とは貴衆兩院を一貫した前内閣反對の諸政黨、諸勢力を綜合したとの意味らしく聞ゆる、伯を驅つて此の如き綜合内閣の組織に出しめた動機は果して那邊に存するか、是は（一）伯自身が政薩聯合の勢力に匹敵する底の一大政黨の首領でないこと云ふことである、桂公没後の伯は、實際に於いて同志會の首領と見われないこともなかつたのである、然し同志會其物が尙ほ衆議院に於ける小數黨に外ならない、之に中正會、國民黨と云へる準大隈系の勢力を合算した處で、尙且少數黨である、伯の立場

として單に衆議院の少數黨の上に立つて、一世一代の政劇を演ずるには、些と心細きの感あらしめたのであらう、無論議會解散の結果其の勢力の膨張を見るは、既定の事實と認めても、是は要するに未來の事實、であると云ふことである、然れば一旦の要鎮に貴族院の勢力を假るの必要上、貴族院側の入閣の必要を感じたものらしいと見るべきであらう、(二)は前内閣破壊の功は衆議院三派に在るよりも、寧ろ事實に於いて貴族院の努力に歸してをる、故に貴族院が政争に關與せざる同院の立場にして、各派の代表者を入閣せしむることを敢てせざるに拘らず、内閣組織者として立てる伯の位置より見て、貴族院を度外視することは難事だと見たのであらう、且つ今回の政變に鑑みて貴族院に對して挑戰的態度に出づるは、極めて危険

なりと考へたのであらう、(三)既に元老の推薦を受けたる以上元老を敵とすべきものでなく、飽くまで之を友とすべきは當然である、元老自身も亦後援者を以て自ら任じて居る、然る以上は元老の好意を確實にするが爲、又貴族院操縦の爲、政策としても貴族院側の入閣を必要と、伯自ら考へたものであらう、大伯隈の立場から觀察を下して見れば、恐らく如上の事情は中らずといへども遠からざるものと見ゆる、而して其れは十分大隈伯の心事を諒とすべきものがあるに相違ない、然るに世間の期待は反對である、伯が老後の思出一世一代の事業として、模範的政黨内閣を組織して、遺憾なく立憲的政治の典型を天下後世に示して貰ひたいのであつた、又伯の平常の言動に徴して伯は當然茲に出づるものと確信して居た、其の期待が

全然外れたので、尠からず失望したのである、此れは何も大隈伯が老いたりと云ふのでは無からう、前段に言ふた如く、幾分周障氣味もあり、亦幾分遠慮に過ぎた傾もあつたものと見えて居る、過ぎた事は詮なしとして、吾人は茲に吾人の遺憾を記して置く。さて又大隈内閣の成立に依り政友會の失望落膽は絶頂に達した。

政友會の失望

政友會は政權に喝した餘り、山本内閣の伴食を務めた結果、已むなき海賊援助の勞に服し、世論の攻撃に大痛傷を受くるに至つた、然らば原も一時山本内閣の辭職、政薩提携の破綻を機として、自分で内閣組織を遂げ、國民黨の犬養、關兩名を入閣せしめて、一半政友會の面目を拂拭し、一半

國民黨に其の責を分擔せしめ、巧に一時を塗過するの案を立て、國民黨の有象無象も一時政國合同の夢の枕を喜んで居た、夢が覺むれば時局一轉、清浦内閣出現の兆見ゆるや否や、原亦末社に言ひ含めて超然内閣排斥の美名を香餌に、政、國、中、同四派連合の反對運動を策して、一時自黨攻撃の世論の抱和を試みしめた、彼れも是れも皆不成功に畢ると共に、井上侯の上京となつた、原は此の機逸すべからずと、密使を派し、侯の上京を途上に要し、自己推薦の議を提出して、見事に侯に跳ね附けられた、此處煩悶の幕となつた、況んや井上老の意向が政友會の怨敵たる大隈伯推薦に在ると聞いては、愈々遣る瀬が無くなつて、最後の必死運動として、盛に大隈伯の悪口を吹き立て、元老の大隈伯推薦を大隈伯の必死的運動の結果な

ご、荒唐無稽の流言蜚語を盛んに播き散したにも拘らず、大隈内閣は至極安全に出産した、先例の無い安産で、母子俱に健在である、是に於いてか政友會も最早如何ともする譯にも往かぬ、然りとて慶賀を申す譯には猶更往かぬ、手持無沙汰の立往生とは、此の政友會の窮狀に向つて適評ではあるまいか。

政友會は十年以來、政界財界の表面裏面に蟠據して、名譽利權併せて墮斷して居たものが、最早誠首を待つばかりとなつた、特に年度換りに勅參其の他政務の要職に就く用意をして居た連中の失望は察するに餘りかある更に議會解散の大厄が降つて來さうである、兎角政友會には早稻田伯は鬼門である、大隈内閣と政友會との對戰如何、是れが今後の見物である。

國民劇の實現歟

要するに大隈内閣の出現は、果して大隈伯の所謂國民劇の實現歟如何である、黨閥の打破、黨弊の掃蕩、國民的政治と云ふものが、果して伯の手に依つて斷行せられ得る歟否歟、吾人の見る所、伯は由來批評家としては殆んど天下一品である、然れども實際國務の總理としては、口數の多きに過ぐるは、未來の行動を自ら縛るの累は無き歟、自家矛盾の口實を、敵黨に與ふるの虞は無き歟、此の點に於いて桂公は不言實行を主義として、山本伯は不言不行で、大隈伯は有言實行の理想を掲げて、門戸開放、新聞記者を應接して、殆んど之を自家の機關の如く使用しつゝある、「立憲政治家」の令名嘖々として傳稱せられつゝある這個男性的態度と勇氣とは吾人の敬

服する所であるが、此れが却つて未來に大累を貽す所以ではあるまいか、願はくば伯の一世一代として始あり終ある國民劇の傑作を我々國民に演じて見せて貰ひたい、至囑に耐へぬ所である。(大正三年四月)

第四章 政界の内幕と臨時議會

犬養、大浦、尾崎の内相運動

事は舊聞に屬するが、大隈内閣が出来る出来ぬの混雑中、伯からの交渉を待たず、内相なれば何時でも承知すると申し込んだのが、憲政擁護の神様犬養木堂御當人で、其の運動者はと承ると尾崎愕堂、關直彦、守屋此助を先頭として八百萬の有象無象の神々であつた、所が旨く親分の大隈伯が諾と請合はなかつたので、右憲政の神様は散々悪罵を浴せ掛けて退き下つた、其の一幕が濟むが早いか花道に出て來たのが、出直りの尾崎と、大浦の二人ぢや。

大浦は桂内閣の内相に直つた履歴を踏まへて、大隈内閣の内相は既得の
權利であるかの如く吹いて居たさうである、其處に犬養幹旋に失敗して、
早くも自分候補と出直つた尾崎愕堂、大隈伯に何と云ふかと、節穴に耳を
當て、聞くとも知らず、イヤ犬養と云ふ男は六十近い今以て、偏狹で感情
的で、内務大臣として多數の地方官を御するには到底不適任で御座る、我
輩も一片の義理で閣下に御推薦は致したが、閣下が之を御採用に成らな
つたのは、流石に閣下の御明鑑で、エツヘン、然らば大浦は甚麽かと云ふ
と、是れは閣下も御承知のサーベル上りの探偵政治家であつて、多年國民
の反感を買つた男で、到底問題になるべくもない、其處で是れはエツヘン
多年政界にも年を取り、エツヘン又困難な東京市長の職にも在つて、聊か

此の間の消息にも通じた拙者に御一任あつては如何、大隈伯は聞き了つて
「うむ开様か、うむ、うむ、宜しい、分つた、うむ、篤と熟考して置かう
うむ」。

乃で此の尾崎、大浦の對等の相撲が大隈伯の胸中に甚麽勝負が付くかと
見て居ると、伯の心臓の鼓動は曰はく、尾崎の言前も確に半分の理屈、大
浦の腕前も確に半分の技倆はある、半分の理屈、半分の技倆、うむ、まあ
此相撲は乃公が預りとして置かうと、其處で伯は二人の背中をボンと叩
いて甚麽ぢや双方とも對等ぢや、内相は乃公が預りに爲て置く、二人と
も怨みこなしぢや、いゝか、うむ、二人とも感心々々、尾崎、大浦苦笑の
體で、東西の溜へ溢々引き下りの始末。

專任内務大臣は誰

然らば大隈伯の兼任は何時まで繼續するかと云ふと、大隈伯は隻脚で、口こそ健在であるけれども、内閣と内務と兩方は運動が少し廻り切れぬと云ふ譯で、近日内閣に踏み止まつて專任内相を置くさうな、而て其の時期と、人選はと聞くと、先づ尾崎と大浦との感情の熱が冷めて、良心と常識とに立ち返つた曉、發表されるさうぢやげな。又其の人選はと聞くと河野大石の二名が既定の候補者で、其の何れが親任の光榮に浴するかは、今の處一寸斷言し難いが、東北代議士連中は暗々裡に河野運動を遣つて居る様子がチラホラ見へる哩。

風聞は其の通りである、今に事實になるかならぬは而て措いて、簡様な

つて見ると、尾崎の價值も、大浦の估券も一時に下落したり曇りだ。

同志會内の大臣候補者

同志會内で今、大臣候補者に數へ上げられし者が、大石、河野、島田、箕浦の四名と云ふことに成つてをるげな、其處に箕浦青洲は數月前、二十五年議員勤績と云ふ功績を以て正四位を賜つたので、最早大臣の方は帳消に爲つた譯ぢやと云ふて居るものがある、之に反して磐州翁と沼南老は勳三等を賜つたものゝ、位階が副はなかつたので、青洲翁と同日に見る譯に往かない、帳消と云ふ譯に往かない、加藤男は爲めに煩悶最中ぢやげな、はて面妖な世の中ぢやて。

不評判の大浦農相

前後二回に亘つた地方官更迭の顔觸を見ると、新人物登庸の點は毫も見
われない、唯政友系の古狸を逐出して、平田大浦系の古狐を埋め合した迄に
過ぎぬ、是れは大隈内相の仕業かと聞くと、開様でない例の黒幕大浦の差
金で、下岡次官が決行したものだ云ふ話ぢや。

今回の更迭を見て、最も不服なものは政友會の連中、怒つてをるものは
元の中央俱樂部の連中、度すべからざる愚物ぢやと見縊つてをる者は、同
志會の中堅分子ぢやさうな、大浦殿も後日の總理大臣を夢みて御座るさう
なが、今回の地方官更迭で最早相場が極つたり鼻と云ふ下馬評。

八代海相估券の下落

權兵衛を豫備にし、財部を待命にした處までは、可なり人氣の有つた八

代海相も、二分五厘の口密錢を室蘭製鋼所から着腹した、山本一派を檢舉
するかと思ひの外、却つて薩摩財閥に製艦造兵の有らゆる注文をしたり、
權兵衛の子分たる野間口少將を中將に登せたりしてをる處から、部内の反
感は中々激しく、筒様な事で海軍廓清が出来物かと憤慨してをる、八代
中將も朝夕神佛に祈禱して御座る程なら、今一息思ひ切つて遣れさうなも
のぢや、コレンバカシの廓清では、八代の社格が下落して、御子孫から怨
まれさうぢや。

女尊男卑の尾崎法相

八代の社格の下落と共に、尾崎法相の相場も段々と降等して來た、古賀
廉造を無罪にしたり、深野二三を放免したり、海軍の檢舉の手を緩めて、

素知らぬ顔をしたりして居る處を見ると、迎も正義の擁護者として、司直の神様として、御輿を擔ぎ、御信頼申てをる譯に往かぬと云ふ者が、段々と殖て來た、我々は尾崎司法大臣が國民の手先となつて、あらゆる不正事件の檢舉に、位地身命を賭して呉れるのかと見て居ると、豈圖らんや、デオドラ夫人の御先に使はれて京阪地方へ大臣旅行、司法大臣官邸に御引越が忙しいとやら云ふことを聞いて、大に失望してをるので御座る。

正義擁護の花井博士と辯護士の花井さん

花井さんが海軍收賄事件に對して、「此の如き嫌疑ある以上は、内閣は當然其の責に任すべきものと思ふ」と遣つた所は、如何にも立派な武者振で國家の選良として國民の聲を代表したものと讀めて置くと、今度は三井の

辯護を引請けて、法廷に出頭して、「此の如き嫌疑があつても、證據の不十分なる以上無罪である」と、例の花井式を發揮するさうぢやげな眞面目なる海軍廓清の議員連は、花井さんの二枚舌の辯論にも困る、アレデは丸で藝人で、政治家の資格は何處に在るかと思つてをるとの評判、成程議會で罪人を譴責して正義の士となり、法廷で罪人を辯護して、多分の御謝禮に預る、辯護士はご旨い商賣はないものぢや。

原總裁と加藤總理の對論

適不適の評判は兎も角、政黨の總理としては、先づ原敬と加藤高明男に指を屈すると云ふ評判ぢや、犬養木堂氏の如きは、一個の策士としては兎も角、一黨の總理たる資格はゼロ。

さて原敬は曩日其の總裁就任式の演説に、中々の氣焰を吐いた、曰はく今日の外交は國家の上から見て憂慮に耐へぬ、曰はく消極的政策は我黨の取らぬ所、曰はく文官任用令の改正は反對で御座る、なご云ふ口吻、之に對する加藤男の返答は曰はく、政友會の文官任用令は例の次官入黨令ぢや、之は早速改正して政務と事務との區別を立つるのが急務ぢや、曰はく消極主義など怪知を付けるが、此の上借金が出来るものか、借りて借りて借り盡して、借金に行き迫つた今日、正心に立ち返つて働かなければ今は一步も立ち行かぬ、之を消極主義と謂はふが、何と謂はうが、其れは言ふ者の御勝手次第、國家を拯ふと云ふことが唯何よりも大切ぢや、曰はく今日の外交は牧野がへまを行つた跡始末の時代ぢや、此の跡始末に案外手間

取るので、其れが雑と片付いたら、其から跡が吾輩の外交時期ぢやと、是れは又原以上の氣焰萬丈、此の對等の相撲の勝負は、國民と云ふ行司の唐打羽の振り方次第ぢや。

デマゴグの犬養木堂

此の原加藤の對論中に、犬養木堂は何をして居るかと聞くと木堂は三浦頭山の御最負連に説法され、沈着な態度を取れと言はれて居るが、頃者日本の商工業者五六十名を嘯集して、長廣舌を揮ふて居る處を見ると、沈着どころの沙汰でない、正に冲天の烽火の氣焰ぢや、政國合同は理想である大隈は援助する、同志會は破壊すると云ふた舌の根は何こに在るか、口は重寶なものであるが、餘り喋舌ると益矛盾するから困る。

大臣熱望の關直彦の狂奔

犬養の御大は世間を瞞着する御都合の好い言を、聖人不凝滞の筆法で八鱗無性に述べて居るが、國民黨の副總理とある關直は、甚麼して居ると見て居ると、大臣にさへ成れば、何處の隅へ往ても苦くないと云ふ譯で、大隈内閣へ必死の割込運動をしたが、頓斗要領を得んらしい、尤も國民黨の獵官運動の末社連は、犬養の代りに、是非關を入閣させて呉れど泣附いて居るさうな、すると大隈伯は面を顰めて、困つたものぢや、關位の人物は同志會内には二三打も控へてをるよなど言ふて居られたさうぢや、是れでは關直も獵官運動に狂奔躁進するを休めて、依然國民黨副總理と收まつて民黨バリで推して行く方得策だ。

原總裁と奥田、大岡、元田の三鏡臺

原が政友會の總裁と決まると總務が三名か五名かと云ふ兩説に分れたさうだ、東北組は高橋ポンチを擔ぎ出し、薩摩芋の連中は床次を擔いだげな處がポンチと芋とは雜作もなく落第して、奥田山陰、大岡中國、元田九州と云ふ事に相場が確定したさうな、而して總裁御自身は北海道、關東、東北から北陸、東海、近畿、四國を掛けて活動なさる事に極つたげな。

筒様なつて見ると原の直參が頗に殖わて、奥田、大岡、元田の勢力に、確に意外に弱い點があつたと分る、其の仔細を探つて見ると、奥田は松田正久の代りに最高幹部に入つたので、比較的好個の人物を其の部下に持つてをるが、之に反して大岡元田は根が札附丈に、二束三文の札附議員を澤

山有つてをると云ふ、其れでは頓斗物に成らぬ。

臨時議會と政國連合の端緒

さて愈臨時議會の幕が開くと、背景の色彩が次第に鮮明となつて来る、先づ劈頭全院委員長の選舉と云ふ一段になると、政國連合で佐賀縣の川原茂助と云ふ札附を委員長に推薦した、見事に落第したのが同志會と中正會に擔がれた菊池侃二さ、政國の連中が何故川原如き充らぬ奴を出したかと聞くと其の理由が可笑しい、大隈伯に對する面當として佐賀縣の政國發展の印に擔いだもんぢやさうな、提灯に釣鐘と云ふバツであるが、黨人心理を委細構はず發揮した處が感服之至。

此の芝居の裏面に隠れた、犬養木堂丈と、原敬の魂膽が觀客席から見ね

透いた居る、原が過般の就任式に、政治上の意見が合へば、何人にも握手を辭せぬと、柄にもない大雅量を發揮したのは、甘く犬養を政友會の妾に呼び取り、大隈伯を困らさうとの時宜に投じた計畫ぢや、處がコイツはホンの口尖計の茶羅ボコで、心にもない囁語ぢやさうな、犬養と云ふ人間が入閣すると、犬養君はケツネで御座ると、昨年の議會で罵倒した福井三郎と申す、楠公の末流とやらで菊水の御紋付の羽織を着てゐる作州の住人を先鋒として、二三十名も政友會から脱黨するげな、此の消息を解せぬものは、御本人の犬養と其の配下で、犬養の素振と云ふと、政友會と云ふ色男にゾツ根柢れ込んで、起ても寝ても忘れられぬと云ふ爲體で、此迄幾度振られても、猶ほ懲妻に往かふと云ふのぢや、原は犬養と云ふ執念藝者に取

り付かれて困つて居る、是が悪女の深情と云ふものであらうとほと／＼持
餘して居るが、其れでも藝者には時々纏頭を與つて三味を引かせて歌はす
が得ぢやと、妙な手附で來い來いと、一寸誘つて居るところぢやさうな。

三派合同は痴人の夢

茲に又一の不可思議は一方は犬養を藝者扱に利用する手合があるかと思
ふと、他方同志會、中正會の策士連には、三派合同を決定して、犬養を入
閣させようと狂奔して居るものがある、然し薩摩財閥と山權の手に、政友會
と連帶に書入になつた人質を、ロハで請出さうと云ふ合同連中の氣が知れ
ぬ、如何に辣腕の原敬でも、彼の男ばかりは厄介者だから、政治界から退
き下つて貰いたい、君子は惡聲を放たずと曰ふから、我輩も黙つてをるが

と、仰向いて居るさうな、原の腹も御存知なく、又薩摩財閥には巨萬を投
じた質物を、無斷請出の出來ると思ふは、痴人の夢ではあるまいか、然し
三派合同の策士連には、山權と薩摩財閥の前に腕マクリする勇氣と膽力で
もあるのか甚麼か。

武富遞相の武者振

臨時議會に近來稀なる熟字が見えた、國民黨の鈴木梅四郎が犬養總理の
吩咐とあつて、尾崎、武富兩相の海軍補充問題に關する變説改論の理由如
何と逼つた、國民黨は當時最も穩健な立場で九千萬圓を承認した、其れを
わるわる言ひ觸したのは尾崎ぢやと詰寄つた、ソコテ尾崎其人は、法相と
して壇上に顯はれたが、一向氣焰が揚らない、武富遞相次に出て來て、例

の莊重の辯を以て、同志會は海軍不正事件の爲め、山本内閣に不信認の意
味に於て、海軍擴張計畫に反對したものとちや、山本内閣が瓦解して海軍
廓清の實を認められた以上、反對の理由は消滅して居りますと、一蹴蹴て壇を
去ると、今迄尾崎へ哩々の防害組が成程と沈黙した、此の變説改論の質問
に、立派に辯明を與へたのは武富で、立往生を遂げたのが尾崎であつた、
成程コレで鈴梅の言草も御座つた、尾崎君のが變説で武富君のが改論であ
つたさうな、政友會の陣笠曰はく、矢張紅木屋の侯爵武富はエライが、尾
崎はテンデ成つちよらんかう、ワツハツハツハ。

議員を子供扱にする大隈伯

大隈伯の施政方針演説は朗讀的であつたが兎も角桂公と違ふて、眼鏡は

用ひない處を見ると、公よりも視力が健全だと謂はなければならぬ、又權
兵衛式の毒々しい處が無くて、ニコボンを稽古して御座る處が、十六年前の
伯に比して、一段の進歩と謂はなければならぬ、演説が濟むと、元田前遞
相を首め、政國の哩々連が質問演説を連發する、其の有様を見てをると丁
度小學校の生徒が、先生に教を聞く様な工合で、大隈伯は早稻田の憲政教
育掛の和尚様ちやと云ふ様な風格を遺憾なく發揮した、御仕舞に國民黨の
一陣笠が質問すると、其の質問は頓斗不得要領ちやと外して仕舞ふた、先
づ横綱と幕下の段違ひちや。

通常議會は解散歟無難歟

臨時議會の無難なること今更申す迄も無いが、通常議會が解散か無難か

と云ふ評判が樂屋内でも中々高いが、其の説は如何と云ふと、大正四年度の豫算が不成立にならうものなら、郵船會社、大阪商船會社、東洋汽船會社、川崎造船所、室蘭製鋼所等の御用商社が將基倒に破産をするさうな、と云ふ次第は、前三者は航路補助の問題で、後の二者は造船造兵の問題で甚麼しても豫算を成立させねばならぬ、如何なる犠牲を拂ふても、議會を通過させねばならぬと云ふので、御日出度く議會は平凡ぢやと云ふてをる又他の説に據ると、四十路の坂を越れた二百七八十の議員達が、一生一度の御即位式の大典に参加したいので、何とか豫算が成立し、無事に議會が終了し、自分共も議員の資格を維持して參列の光榮に浴することが、僥倖にして出来るやうに、神佛に御百度を踏んで居ると云ふ評判ぢや、乃で、

親分連中は、解散の爲の黨資を作る事と、子分の議員に名譽てふ油揚を啖はして、愈大隈内閣を突撃するの準備をしてをると云ふ風聞が専らぢや。

政薩國の連合密約

其處で愈解散になると原敬は百八十名を出し、犬養木堂は六十名を出すと揚言し、之に對して同志會の大石入道は二百名を出すと豪語してをる、これを見ると、誰も己惚たものと曰はなければならんが、景氣附に法螺を吹くことも一種の黨勢張擴じやて。
さて政友會では總選舉の準備として、大枚一百万圓の軍資調達計畫も出來、參謀部の作戰計畫も確定と云ふ、幸先好い内報が、頻々と來るさうぢやげな。(大正三年六月)

第五章 地方遊説と政界の裏面

多忙なる地方の政戦

臨時議會が僅かに濟むと、俄に地方の人氣が活躍して來たと云ふので、大隈總理桃山の御陵參拜を兼ねて京阪地方に遊歴せられ、國民黨首領犬養木堂は先づ自家の根據岡山縣を首として近畿方面に遊説を試み、政友會も東北地方から諸方へかけて、到る處巡回演説に多忙を極めて居る。

精力絶倫の大隈總理

大隈總理は京阪地方で毎日演説三回に及び、毎會滿員の聽衆に多大の感動を與へられたと傳ふ、伯は彼の北守南進説の愚論たることを大聲喝破せ

られたにも拘らず、聽衆は毫も其の犬養攻撃と云ふことを感じたらしく見
なかつた、世間の耳は肥れた様でも未だ未だ幼稚ぢや、然し伯が七十七
歳の老軀を駈つて、苦熱最中に活動せられた、精力主義の發揮は、『日本は
貧乏である、七十七の我々迄此の如く活動しなければならぬ』と云ふ演説
の證據を實現して、大に若年寄の面々を慚死せしめたさうな。

大政一新は大隈伯の使命

此の以外、伯の語られた所を聞くと、現代生活の不滿に對する鬱勃磅礴
たる氣分に充たされて居る、曰はく海軍省の腐敗、曰はく議員の腐敗、曰
はく實業家の腐敗、曰はく宗教家の腐敗、數へ來れば社會の全面靡爛敗潰、
鼻持もならない程ぢや、此の腐敗状態を一掃して清新の天地を見たいと云

ふのが、我輩が國家の爲に老軀を駈つて、出慮した目的ぢや、猶此れのみではない、滿鐵も改革する、外交も刷新する、政治も大正の維新を遣る、薩長は最早死んで居る、今頃閥族打破など俗受を言ふ愚物があるものか、我輩は國民の政治を遣る、君民同治の政治を遣る、是れが我輩の大正維新の使命ぢやと喇叭を吹くと、聽衆はいづれも現代生活の不平不満者の集合と見えて、拍手をする、喝采をする、大隈伯を現代の救世主の如く拜み立てるといふ有様である、伯も既に此の誓約を與へ、此の如き信頼を受けられた以上、愈々益々腐敗の掃蕩、罪惡の檢舉を實現して、信賞必罪、破邪顯正、善惡是非の區別を明白にして、國民の道德を墮落の淵より拯ひ上ぐるに成功して貰ひたい。

同志會の遊説

同志會の大隈伯を近畿方面に煩はして、黨派以上の喇叭を吹かせ、大浦子を東北地方に出馬させて、産業開發、勤儉力行の講釋をさせて居る、或る消息通の説に、關西は大隈伯に限るが、東北は又大浦子に限ると曰つてをる、其の理由を叩けば、關西は現代文明の先進である、反對に東北は二十年も後れて居るので、大浦の勤儉力行が大當りぢやそうな、ソコ大隈の御大將と大浦の庄屋様の頭腦を比較すると、丁度二十年の差があると云つて居る、成程そんなもんか知らんて。

憲政の神の詭辯

一時憲政の神様と仰がれた犬養木堂も八百萬の神に下落してから此方、

大に地方の民心を收攬するに勉めて、手段など構つて居れぬと云ふ仕鱈ぢや、つい此の間までは大隈内閣を援助する、政國合同は理想に過ぎぬと公言して、舌根未だ乾きもあへず、近畿方面の演説で何を言ふかと聽いて居ると、先づ第一に進歩黨の總理であつた大隈伯を無遠慮に罵倒すること、第二に同志會と尾崎とを極力攻撃すること、第三に政友會に有意味の諂諛を呈することであつた、曰はく『我黨と政友會とは改進黨、自由黨の當初より閥族打破を目的として起つてゐる黨派にして、閥族とは氷炭相容れざる歴史を有す云々』とあつて、第四には『海軍醜怪の元兇』山本權兵衛の擁護であつた、これには流石の木堂本人すらも、自分の口の重寶過ぎるに驚いて居るだらうと云ふ評判。

木堂の愕堂攻撃

『行路難は水にもあらず、山にもあらず、祗人情反覆の間に在り』昨年提挈の憲政の神達か、今年は大猿も雷ならざる、醜ともない間柄となつた、當にならぬが浮世である、扱も木堂の愕堂攻撃の理由には、原因と動機の一つがある、先づ二柱の神の一は、愕堂がアハ善く人間に立歸つて、國務大臣と成り濟した、其れに對する風界客氣が原因で、動機は敵本主義の御多分に漏れず、例の山權と薩摩財閥と原政友會に對して忠勤を抽んずる奉公振ぢや。

時勢後れの孤壘主義

此の外犬養木堂が京阪地方で民心收攬に試みた文句は、『孤壘を守つて三

十年來の晩節を全ふする」と云ふのであつた、木堂の孤壘主義も久しいもので、舊式の變人仲間こそ、今以て歓迎するかも知れないが、大正の時勢はもはや褊狹な孤壘主義を許さぬ、時勢の要求は責任内閣の樹立である、市川文藏、高木正年、金尾稜嚴、紫安新九郎、關和知などと云ふ國民黨中錚々たる代議士等が、多年の情誼關係を絶つて、連袂脱黨した理由を訊くと、皆異口同音に、「犬養氏は感情家でふる虚偽の政治家だ」と斷言して憚らない、論より證據は、大隈内閣の組織せらるゝ當時、代議士會は擦つた揉んだの大騒ぎの揚句、結局纏つた決議が、「我黨は大隈内閣の成立を希望し、且つ之を援助す」と云ふのであつて、此れ以外には何等の協議もなかつたのにも拘らず、犬養總務は、「我黨よりは何人も入閣せず」と獨斷して

代議士會の決議の如く外部に發表して、素知らぬ顔の半兵衛を極めて居る目的の人物で御座る、民權主張の犬養が此の如き專制政治を、同黨代議士間に行ふて居るなどは、殆んど想像されない事であるが、事實は右之通であるから、關(和知)君などは怒るまいことか、非常に憤慨して絶縁したのだ、無理もあるまい。

政友會の地方遊説

政友會では總裁の原は出馬せず、大岡硯海、高橋脱線、床次竹二郎其の他の哩々連を地方遊説に駆り出して現内閣の消極政策を攻撃して、到る處鐵道港灣の請負を時節が來たら又遣るぞと茶羅錚を並べて居る、國民黨の攻撃は例の政薩國の暗黙の連合もあるので、態と避けて、大隈攻撃と同志

會打破に熱中して居る、中に就いて尾崎攻撃熱と來たら正に百度以上ださうな。

大岡の尾崎を乞食呼はり

大岡硯海が東北地方に出かけて尾崎法相を乞食呼はり仕たさうな、成程電報は簡短であつたけれども、我輩には能く讀めた、尾崎は伴食である、貧乏である、サキが見ぬ、それで乞食は當り前である、別段何等の不思議はない、大岡前文部大臣足下などの様に、議會や公會で演臺に上るたんに、日糖事件の豫審調書を讀み上げられて眞蒼になる人よりは、乞食の方が餘ッ程増しぢや。

地方戦より中央戦へ

地方の遊説が猛烈で、各派意見の相違が甚だしく反對熱が互に極度に達するに至らば、來る通常議會の政戦は遂に政府と政友會との衝突となり、議會の解散を見るやも知れぬ、次いで來る問題は總選舉の結果、政府勝つか政友會勝つかの一點に在るのである。

政友會の魂膽

議會解散、總選舉執行の結果、若し政友會の勝利となると、立憲主義を標榜した大隈伯は内閣を投げ出して、お鉢が政友會に廻る、乃で西園寺侯が總理になるか、西園寺侯の推薦を受けて、原敬が成るか疑問であるが其の場合に薩摩財閥の代表者一名の入閣と、大阪商船の中橋が遞信大臣になる事だけは確定してをる、其の際國民黨は誰を出す積かと曰ふと、犬養

を内務大臣にして貰ひたいと曰ふてをるが、無論原敬が承知すまいと云ふ取沙汰である、其の他誰々が大臣候補者と云ふのであるが、餘りに又天機を漏すと、失望落膽する豪傑連が澤山出来るから、其のお顔觸だけは、當分お預りとして置く。

政友會の希望

處が政友會の智囊中には、軍資金の百萬圓も使つて、國民の反感の前に不利益な戰爭を試みんより、戦はずして勝ち、勞せずして敵壘を乗り取らんと云ふ名案を立て、をるげな、戦はずして勝つ名案と云ふのは、大隈爺様に死んで貰へば、明日でも内閣が取れることになるから、何とか百二十五歳の爺様が、七十七八でクタバツテ呉れぬかと云ふ、南京事件以來の希望

條件と云ふもんぢやさうな、出来ない相談と笑ひ玉ふな、大隈伯も一たび理想だに遂げれば、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりぢやと、早稻田御殿の後援會の大氣焰であつたから、實際名案でないとも限らぬと、或る伸氣屋が申して居た。

岡崎と原との反目

政友會の智慧袋とある岡崎邦助、近頃東京の住宅を拂つて、大森とか鎌倉とかに引移ると云ふ話であるが、是れは至極最の始末ぢや、人間は段々と年が寄るから、静養の爲の閑静な隱宅が、そろ／＼必要になつて来る、處で世間では原敬と何か衝突の結果、轉地するかの様に話して居るが、其れは眞赤な嘘言である、黨勢擴張問題で原と意見が違ふたと云ふ位のこと

で、まだく策士の活動は是から先ぢやテ、岡崎の狐が東京に舞戻つて來る。ところが、屹度あるから見て居たまへ。

伊東、後藤、岡崎の會合

此の大正政界の三人男は、恰も三個の慧星かの如く、一時も静坐して居れない連中で御座る、先日來も屢々木挽町邊の待合で會合したものであるが、如何に智慧囊を絞つて見ても、此の政界が當分動きさうにもないので三人の三疎みに終つたさうな、伊東の大人も一時は自由黨の黨師とあつて關東會なんぞで、都合の好い政府擁護の喇叭を吹いた事もあつたが、時勢一變の今日、今更政黨の總理や黒幕でもあるまい、サラリと野心を葬つて樞密院に隱居して、徐ろに國家の爲に盡さるゝのが、何より安全の策だが

な御座らう、後藤男も其の通り、躁狂の餘り同志會を脱したのが、蹉躓の本と觀じられたら、今少し落着いて居られさうなものぢや、今更いくら狂奔された處で、三十名の乾兒の地盤が政友會所屬であつて見れば、輕卒な舉措も先づ一寸出來まいで、當分篤と形勢を觀望して、活躍の時期を待つ事として、其の間精神修養が肝心で御座らう、チト大石入道や河野磐州あたりの眞似をして、禪學でも遣られては如何で御座るな、いや野狐禪でも宜しい、遣らぬに勝る、入らん世話ながら、先づ國家の爲に御勧めして置く。

樞太事件の連累

此の苦熱の時節に似合はず、地方の政戦が正に酣はなる最中、中央では

樞太事件とやら何とやらで、政友會の四天王とか呼ばるゝ御連中が、今に珠數繫ぎに繩が付くさうなので、そんなじよ其處らが此の暑さに大恐慌を來して、議員も陣笠も異口同音、此れでは逆も溜らん哩、俺等も一生一度の御即位式に、參列が罷り叶はんのか知らんと、いづれも青息吐息の最中で御座る。

滿鐵の紛争

滿鐵は中村總裁が辭職し、國澤副總裁が卒倒した當時から、難問題の一となつて居る、政友會が伊東大八の副總裁に野村總裁を据物に付けて、事實上の總裁となして、滿鐵會社の横領を試みるに至つたので、茲に黨弊打破の必要が起つた、黨弊打破には我々も大賛成、大八を解職し、野村總裁

を免黜して情實を一掃するのは頗ぶる結構、初手から此の二人に同情を表したのは、山權、原敬、床次と云ふ和製の鐵道屋の外なかつたのである、今にして此の處分沙汰を聞くのは、寧ろ遲きを感じる位。

大八の罪惡

一體原敬なるものが赤阪の待合林屋の亭主役たる大八如き、人格劣等、經綸絶無の人間を僱ふたのが間違の初さ、此の國家を無視して、黨利に汲々たる大八は、僱主原敬に忠勤を抽んでんが爲に、滿鐵の東京支社の地面を賣飛ばして、不正の着服を企てんとしたり、或は滿洲へ渡航早滿鐵の金庫から、大枚七十萬圓を政友會の或筋へ、營業に反したる目的の爲に流用せんと試みたるが如き、誠に以て不埒千萬、傍若無人の所業と謂はなけ

る。

不適任の野村總裁

技術家の野村は敬服に値するが、然し經綸家としての野村は無價値である、之を推薦したのは誰かと云ふと前鐵道院總裁の床次竹二郎であつたら無理もない、ソコで一技術師に總裁の虚名を與へて、實際の總裁には待合の亭主ヅレを當がつたので、規律の紊亂、事務の不統一を來したのは自然の結果ぢや、況んや滿洲に常住すべき總裁理事等が、悉く東京に居流れて騒いで居たに至つては、官紀上節制上、不都合千萬の話である、當の責任者たる野村總裁の解職も當然の結果と謂はんの外なし。

中村中將の滿鐵總裁

結局黨弊打破の結果、野村總裁と伊藤副總裁の解職となつて、製鐵所長官中將中村男が總裁に拔擢せられ、會社營利事業以外、滿蒙經營の衝に當り、國民的經綸を試みる事になつた、男は事務家として、經營家として、軍人として相當の經歷を有し、今日まで至る所好評を博した人物で、敵のないのは事實である、今後關外の重鎮に當つて如何の技倆を發揮するか、一番同中將の手腕を拜見したいものぢや。

滿鐵の根本的改革

滿鐵は日露戰役後に成立した當初、主として三井の顧問役の稱ある井上侯の指名に依つて重役が出來揃ふたものであつて、當然の結果として三井

の●使●用●人●が●多●数●幹●部●に●入●つ●た●譯●ぢ●や、而●し●て●三●井●と●大●阪●商●船●と●連●絡●を●保●つ●て●滿●鐵●の●經●營●に●任●じ、同●時●に●海●軍●が●大●連●の●造●船●所●を●分●捕●し●て、之●を●薩●摩●財●閥●に●無●代●價●同●様●で●拂●下●げ●た●結●果●と●し●て、自●然●三●角●同●盟●の●實●を●爲●し●て、其●の●方●面●に●多●大●の●弊●害●を●發●生●し●て●を●る●現●狀●で●ある、滿●洲●は●三●井●の●滿●洲●、滿●鐵●は●三●井●の●出●張●店●と●云●ふ●位●の●關●係●に●成●つ●て●を●る、此●等●の●情●弊●を●打●破●し●て、飽●迄●も●自●由●競●争●の●原●則●を●發●揮●し●な●け●れ●ば●な●ら●ぬ●の●で●ある、先●づ●當●面●の●積●弊●打●破●は●是●れ●で●ある、其●れ●か●ら●後●が●滿●蒙●經●營●の●新●階●段●に●移●る●の●で●ある、中●村●總●裁●の●肚●裏●に●果●し●て●此●の●積●弊●に●對●す●る●根●本●的●改●革●の●抱●負●が●ある●か●怎●様●か、我●輩●與●り●聞●き●た●い●の●ぢ●や。

山内中將茶番の腹切

松●本●和、澤●崎●寬●猛●以●下●の●收●監●以●後●海●軍●收●賄●問●題●も●一●段●落●を●告●た●と●思●は●れ●て●居●る●矢●先、突●然●再●び●山●内●中●將●の●腹●切●と●云●ふ、意●外●な●一●喜●劇●に●驚●か●さ●れ●た、事●の●起●り●は●室●蘭●製●鋼●所●の●口●密●錢●問●題●に●關●す●る●世●間●の●取●沙●汰●が●餘●り●に●高●い●の●で、不●問●に●附●し●て●置●け●ぬ●と●あ●つ●て、司●直●の●府●で●は●檢●事●正●の●自●宅●で●内●々●調●査●に●取●り●掛●つ●た●結●果、前●室●蘭●製●鋼●所●長●で●御●座●つ●た●貴●族●院●議●員、海●軍●中●將、男●爵●山●内●滿●壽●次●と●も●ある●御●方●が、檢●事●の●訊●問●に●急●所●を●突●か●れ●て、恚●て●は●親●分●山●權●大●將●に、縲●綆●の●辱●を●及●ぼ●さ●ね●ば●な●ら●ぬ、其●れ●で●は●何●と●も●申●譯●な●し●と●あ●つ●て、檢●事●の●自●宅●へ●出●頭●す●る●代●り、自●宅●の●一●室●で●腹●十●文●字●に●搔●き●切●つ●て、咽喉●に●短●銃●二●發●當●て●が●つ●た●が、武●士●道●の●鍛●鍊●の●頭●に、山●權●の●洗●禮●を●受●け●た●結●果、俄●に●命●が●惜●し●く●な●つ●て、「遣●り●損●な●つ●た」の●一●齣●の●茶●番●に●息●を●附●け●た、

跡が経過良好、不日快復とは、何たる滑稽！。

日本刀を辱しめたる山内中將

此の事變を聞きつけた乃木崇拜の某將軍は座客に向つて、彼山内の所業こそ正しく吾が光輝ある日本刀を辱しめた卑怯の振舞と、拳を固めて憤慨した、と座客は咄嗟に之に對ひて、彼の山内の腹切刀と云ふのは、彼れは日本刀でなくて、ヴェキカースから献上した生鈍刀で御座つたのぢや、其の短銃も山内式の自働砲なので、アームストロングから献上したので御座ると遣つたので、將軍ハタと膝を打つて、成程其れで讀めました、日本刀の面目も其の辯明で立ちましたのぢや、成程彼の男は乃木將軍の門下でなく、山權の弟子で御座つた哩イヒ、。

尾崎法相への所望

室蘭製鋼所事件の調査が、今猶ほ進行しつゝあると聞いて、我輩も幾分か意を強ふするものゝ、まだく逆も満足は出来ぬ、室蘭は勿論の事、海軍の山權一派が秘密結社の下に、造犯してをる大小一切の罪惡を悉く檢舉し盡して、所謂一網打盡の英斷に出なければ、決して輿望に副ふ所以でない、内外の造船會社の十呂盤から割出した國防計畫や、造艦計畫に賛成することが怎樣して出来るか、尾崎法相自身既に業に之に極力反對した以上、一段勉励して、一切潜伏の國惡を掃蕩の上、國民的國防計畫を實現して貰ひたい。(大正三年七月)

第六章 歐洲大亂と日獨戰爭

炎熱と農作

今年は意外の炎熱で、内地は臺灣より暑いと云ふ評判で、三十年來の暑氣と稱へて居るので、中央地方の政局も苦熱煩悶の最中、得意の喇叭も少々吹けず、一先中止と云ふ有様に閉口して居る、然し農家では此の暑氣は何よりの慶事で、本年の豊作は動かないと云ふてをる、尤も北陸の一部に出水したとか、或は二百十日の天候を危ぶむ向もあるけれども、大體に於いて炎熱の結果、豊作と確定して、農家萬歳とは結構で御座る。

政戦休止と海外事變

さて苦熱の爲、計畫した地方遊説は政友會、同志會、國民黨、孰も一先中止となつた、此れから避暑にでも出かけるかと云ふ手合もあつたが、意外にも七月末から急に巴爾幹半島の風雲の不穩に次いで、塙塞關係の破裂となつたが、然し國內の政權爭奪に忙しい大家連は、竟畢小競合位ですむものと多寡を括つてをつた、曰はく歐洲人は命が惜い、金が惜い、到底物になるものかと、豈圖らんや是等の觀測はガラリと外れて、二十世紀の劈頭から、必ず斯うよと期待せられた、歐洲大戰の一幕が到頭物になつて來た。

歐洲大亂と日英同盟

さて愈獨塙對露佛英の抗戰に、白耳義も參加して、愈歐洲大亂の状態と

なつた、同時に東洋に於いても獨艦が出没する、露英の商船を遠慮會釋なく捕獲する、日本の商船を誰何すると云ふ次第で、東洋の天地も何となしに穩かならざる徴候を呈して來た、結局日英同盟の精神と條項とが如何に具體的に活現するか、是れからが觀物だと云ふ段取にまで進んで來た。

英國よりの交渉

歐洲大亂の渦巻は遙に東洋に波動し來り、英國政府から早速帝國政府へ交渉して來た、曰はく東洋方面に獨逸の軍艦が出没して、商船を捕獲して航海の自由を危害するから、之を至急に擊攘つて貰ひたいと、英國交渉の内容は單に此れだけであつたらしい。

元老會議と政府の態度鮮明

處が何より必要なる事は、日本には桂公が「凋落する元老」と稱へた山縣、大山、松方、井上など云ふやうな古物が、今日猶生きてをるので、大隈内閣が在來の慣例を重んぜる結果、八月八日元老會議の召集と相成つた事は意外に落着して、何時にても出兵すると云ふことに一決したと云ふ事、ちや、即ち業に既に東洋の平和が破壊せられた以上、日英同盟の精神に遵つて、帝國政府は何時でも蹶起を辭せぬと云ふ事になつたのである。

大隈伯の御馳走政略

然うなると得意満面の大隈伯は、愈帝國發展の時節到來とあつて、例に依つて子の如く來る的新聞記者等を集めて、得意の快辯を揮ふて、「近日内に御馳走をする」と云ふ豫約の御披露に及んだとやら、そこで各國の大

使館では伯の御馳走の意味は、日本の領土擴張の野心を漏したものと見當を附けた、此の處一寸拙かつたので、列國をして日本の態度を猜疑せしむると云ふ結果を來したと云ふ、株屋筋の言草ぢや、いやはや飛んだ事でおじやる哩。

大岡の膠州灣還附論と高橋の不景氣論

茲にも又御馳走の正體は何物で御座るか、政府の御意見を拜聴したいと云ふので、最先に早稻田伯を尋ねたのが天下の大政黨政友會の總代たる大岡前文相と、高橋前藏相とであつたげな、所が御意見拜聴と出かけた此の兩人は、御喋舌が伯以上だと見えて、伯の意見をも確かめずに大岡硯海は膠州灣は日本に貰ふて迷惑だから、此際支那政府に還附するのが得策ぢや

と云ふ論調で、同時に高橋脱線は時局問題はさて置いて、今日是不景氣で困るから、何とか之を救済する道を政府に講じて貰ひたい、と歎願すると云ふ始末であつたさうな、其れから政友會本部に返つての報告を聞いてをると、大隈伯の答辯は結局不得要領に了つたと、茶羅鉢を云ふて居るんぢや。

不景氣製造の本案は政友會

さて此の不景氣を製造した當人は誰かと云ふと、權兵衛内閣の藏相、高橋脱線御自身で御座つた、此の脱線和尚無暗矢鱈に積極主義を唱へて、出鱈目の財政策を振廻した結果が、取も直さず此の不景氣で、其の提灯持を務めたものが政友會、之を政府の政策として議會に提出したものが山本權

兵衛で御座ろうがの、自分の失策で今日の不景氣を招いて置いて、大隈伯に
譬拭の歎願を持ち出す所を見ると、此の脱線は自分が前の大藏大臣であつ
たことを忘れてをるらしい、ヒドイ脱線ぢや、政治家もこれ程健忘症に罹
つて無責任に脱線したら、其れこそ口は重寶に動いて、天下の愚民を欺く
ことは何でも無かろう、脱線和尚萬歳？

北守南進の犬養木堂 巳

政友會は黨の意見は言はずに大岡一己の意見らしく見せかけて、膠州灣
還附論を大隈伯に持ちかけた、所が國民黨の犬養首領は例の伯の最も排斥
置かざる所の北守南進論を持出して、此の時局を解決したいと云ふ譯で、
到頭一時間の長きに亘つて此の炎天に熱辯を振ふたさうな、處が伯も北守

南進の裏面には、權兵衛が隠れてをつて、結論が海軍擴張となるので、其
の熱辯を柳に風と好い加減に、御尤の體度で聞き流したと云ふ取沙汰ぢや。

日英交渉遲滞の真相

さて内に在つては政友會と國民黨、さては、貴族院の連中までが早稻田
伯に面會して、政府の所見を承ると云ふ名目の下に、種々の注文を擔ぎこ
む、同時に外國の模様はと云ふと、日英交渉が意外に遲滞を來したので、
今度は轉じて加藤男に對する非難が、山權の采配から、相應有力な連中を
促發した、權兵衛が此の際居つたら、开んな莫迦の事は遣らぬと觸れ出し
た、其の實際を叩いて見ると大した事も別になかつた、事實英國の當初の
交渉が簡短に過ぎた爲に、我よりは其の大體の方針を承りたい、實は國の

威●嚴●に●も●關●す●る●こ●と●で●あ●る●か●ら●、●詳●細●方●略●を●承●は●り●た●い●と●曰●つ●て●遣●つ●た●の●だ●、●先●方●で●も●支●那●政●治●顧●問●モ●リ●ソ●ン●博●士●の●中●傷●も●あ●つ●た●の●で●、●甚●麼●し●た●も●の●か●と●熟●考●の●爲●、●一●寸●暇●ど●つ●た●も●の●で●あ●る●が●、●何●の●事●は●な●い●、●モ●リ●ソ●ン●顧●問●が●大●隈●伯●の●所●謂●御●馳●走●に●尾●緒●を●付●け●た●の●で●、●一●寸●延●び●た●と●云●ふ●ま●で●ぢ●や●。

遅延は結果に於いて良好

成●程●擦●つ●た●揉●ん●だ●の●騒●の●揚●句●、●帝●國●の●態●度●が●餘●り●に●鮮●明●で●、●伯●の●御●馳●走●呼●は●り●が●過●ぎ●た●爲●に●、●多●少●時●間●の●消●費●せ●ら●れ●た●の●は●事●實●で●あ●る●が●、●結●局●英●國●か●ら●は●戰●争●區●域●を●東●洋●に●限●る●事●、●膠●州●灣●は●貴●國●海●陸●軍●に●御●依●頼●申●す●と●云●ふ●事●で●、●結●局●東●洋●よ●り●獨●逸●の●艦●隊●を●驅●逐●破●壞●す●る●事●、●膠●州●灣●を●陸●海●軍●の●力●で●占●領●す●る●事●に●極●つ●て●、●範●圍●の●は●つ●き●り●し●た●だ●け●は●、●將●來●の●誤●解●を●除●く●上●

に●必●要●の●所●置●と●謂●は●な●け●れ●ば●な●ら●ぬ●、●此●の●點●に●於●い●て●も●あ●る●方●面●の●政●客●軍●人●仲●間●に●は●、●加●藤●男●の●此●の●注●意●周●到●な●點●を●、●却●つ●て●大●人●の●風●な●し●と●非●難●す●る●向●も●あ●る●が●、●然●ら●ば●無●暗●に●大●人●振●つ●て●、●世●界●的●に●活●動●す●る●積●り●で●、●襪●襪●船●を●南●洋●へ●と●繰●り●出●し●て●、●英●國●か●ら●待●つ●た●待●つ●た●、●其●處●は●御●免●蒙●る●と●出●ら●れ●た●日●に●は●、●大●人●の●雅●量●ど●こ●ろ●か●、●器●量●を●下●げ●て●引●き●退●ら●ざ●る●を●得●な●い●様●な●始●末●に●了●る●よ●り●な●か●ら●う●で●は●な●い●か●。

大隈内閣乗取の失敗

日●英●交●渉●中●突●發●し●た●暗●中●の●飛●躍●は●政●友●會●の●内●閣●乗●取●の●陰●謀●で●あ●つ●た●、●大●隈●伯●や●同●志●會●の●一●味●に●、●今●度●の●甘●い●功●名●を●さ●せ●て●溜●る●も●の●か●と●あ●つ●て●、●政●友●會●は●一●面●に●は●非●國●民●的●の●膠●州●灣●還●附●論●を●大●隈●伯●に●擔●ぎ●出●し●、●他●面●山●縣●、

松方の元老連に、恁う云ふ時局に大隈などをして外交に當らしむると國家を誤るから、一番此の際元老中の何人か、總理に出られて、政友會の後援を以て、大隈内閣を蹶倒して、甘く遣られては甚麼ぢや、今度の大隈伯の主戰的態度が氣に喰はぬと、黄色い氣焰を吹きかけると、山縣は大隈以上の主戰論者で、一向無頓着なので、是では可かぬと、松方侯を煽動して見たが、老爺さん何でも角でも事が面倒にさへなれば、山權計畫の海軍擴張が出来るにあつて、火事泥的に腰を据た、意外な主戰論者と來て居るので、政友會の策士連も、到頭閉口して了ふたと云ふ話ぢや、政權爭奪の外に目のない政友會の仕事としては、遣りさうな猿芝居ぢや哩。

最後通牒と貴族院

十五日になつて、帝國政府から最後通牒として、獨艦處分問題と膠州灣租借地全部を、支那に還附する目的を以て、無償條件にて帝國官憲に交附することを、獨逸へ通ずると、貴族院の定連中には、加藤の如き書生論を曰つては困る、餘り遣方が過激だと云ふものが有つたが、其の裏面を叩いて見ると、例の高橋脱線が日本銀行總裁時代に、日露戰役の外債募集に盡力して呉れた、獨逸種の米國人シツプと云ふ猶太人から、日本と獨逸とは今日險惡な關係でもないのに、此の如き通牒は殘酷だ、今少し平和的に頼むと云つて來たので、脱線和尚は大に脱線し、貴族院の連中を説き廻つて、大隈内閣の遣口を惡様に非難した、其の結果ぢやげな。

山本閣海軍の不平

斯の如く在野黨の暗中飛躍の眞最中に、政府の機密を漏したものがあると云ふ評判ぢや、これは海軍側の仕業ぢやとは、十目の視る所である、一體山本權兵衛は南洋方面の事は、遠洋航海のある毎に若干の報告を得てゐて其の方面の事は大先生氣取りで御座るが、支那の方面は全く一向御存知ない、是れと同時に其の中に人となつた海軍の連中は、南洋方面に大發展を希望してをる、南洋方面に大發展と云ふ事は、結局海軍の大々的擴張の動機になるから、多年此事を覬窺して居た處に、今度の戦争は支那海方面に局限せらるゝ事になつたので、海軍大擴張を夢みて居つた連中は、益々不平を起して、結局外交機密の漏洩に、不平齟を仕てをると云ふ説。

日獨同盟論者の失望

海軍では南進が出来ぬとあつて、權兵衛閥の乾兒が大不平となつたが、陸軍では餘り獨逸を崇拜して、獨逸にばかり多數の軍人を留學せしめて居た結果、東洋の平和を維持して露國に當るには、日本の力では往かぬから日獨同盟して當らなければならぬとあつて、日露の鈞衡を維持する爲に、二箇師團増設を唱へて來て居たのぢや、然るに今度露國は、日露同盟を締結すべし、南滿洲と山東省とに日本が堅固の土臺を造るは日本の國是だと露國の新聞紙より御座つたので、參謀本部の獨逸ハイカラ黨の失望は意外ださうな。

袁世凱とモリソンの運動

さて相隣の支那では日獨事件を甚麽見たかと云ふと、袁世凱は獨逸公使

に煽てられて、日本に對して兎角邪魔をするやうな處が多い、同時にモリソン博士が倫敦にて頻りに日本の裏を搔いたらしい、此の人は曾て日露戰役の際には、露西亞を仆すは日英共同の目的ぢやと喇叭を吹いた、倫敦タムスの通信員であるが、近頃は自己の政治顧問の位置が、動もすると危険に瀕するので、頻りと日支の關係を阻害することに熱中して、北京の英國公使と連合して、排日的行動を遣つて御座るぢや、英國が今度の交渉に手間取つたのも、モリソンと袁との握手に基づく惡戯の結果で、英京での暗中飛躍的一幕が、此の事であつたらしい。

無言拒絶の獨逸

さて最後通牒は二十四時間乃至四十八時間と云ふのが、外交上の規定で

あるが、大隈伯の大雅量で、交通が不確實であるからと云ふ周到の注意に依り、八日間の期限を與へて、獨逸の返答を求めたが、右電報は意外に早く到達したにも拘らず、獨逸政府は二十三日の正午と云ふ期限まで、無言拒絶を表示した、是より先き或る有力の政客は、日本は須らく大雅量を示して、獨逸に向ひ、膠州灣を支那へ引渡す様勸告するが善いと云ふたさうであるが、中々以て、十七箇年の苦心經營を一遍の最後通牒で渡す譯に往かぬ、此處が獨逸人の氣質ぢや、其れでも裏面は何か他日の占領を繼續せんものと、北京の策士を使つて袁世凱に膠州灣還附を持出したので、袁は其の時期に非すと、巧く蹶つたと云ふ風評ぢや、孰にしても膠州灣は高價なもので御座る。

大詔煥發と膠州灣

其處で到底平和の解決法が絶わたので、大詔煥發と云ふ事になつた、日獨兩帝國はもはや交戦状態に入つた、是からが眞劍勝負の太刀打ちや、六千の守備兵も決死的だと云ふてをる、獨逸皇帝は膠州灣總督に母國の爲に膠州灣を死守せよと云ふ嚴命を下したさうである、日本は日清、日露の兩戰役に旅順を占領した經驗があるから、萬々如才はあるまいが、陸海軍の活動と國民の後援は、平和を克復する上必要ぢや。

膠州灣の將來

愈戰爭となつて、武力を以て相見ると云ふ以上は、獨逸政府に當てた最後通牒は反古に歸し、膠州灣租借地全部を帝國に占領するのが目的となり

同時にもはや支那に還附すと云ふ條件は消滅した、吾が陸海軍は唯右租借地全部を占領すれば可いのである。

租借地全部の内容

さて租借地全部となるに附帶の要件があることを忘れてはならぬ、即ち租借に附帶した條項が二件ある、一、鑛山採掘、鐵道布設に關する件、二、山東省に於ける放資優先權に關する件、即ち膠州灣を占領すれば、此の權利は占領の結果として、當然我邦に移る譯ぢや。

獨逸の膠州灣還附

事件の最中に、膠州灣を支那へ還附すと云ふ獨逸の奥の手は何であつたかと云ふと、租借條約の一箇條に「獨逸の都合に依り、膠州灣を支那に還

附すべき願意を發言する場合に、支那は獨逸が費せし諸費用を賠償すべく且獨逸の爲に更に膠州灣よりも適當なる地域を割讓すべき事を契約す」と云ふ事が、三十一年の租借條約の重大なる箇條である、獨逸が策士を使ふて袁世凱に返附しよう云ふ魂膽は茲に在るので、日本の手から支那に直接の引渡を許さぬのである、之に對して日本が獨逸へ一應日本に引渡せよ云ふ所以も茲に在るのぢや、加藤外相が此の點に注意を拂つた處は、感嘆を拂はざるを得るのである。

山東鐵道問題

膠州灣還附に味憎を付けた獨逸は、今度は山東鐵道を米國の資本家に讓渡すと云ふ風評ぢやが、是れは譎怪千萬ぢや、租借權全部引渡せよ云ふ事

が、既に戰爭の原因になつた以上は、此の事件進行中に租借權に伴ふた鐵道を、米國の資本家に讓渡すと云ふのは、言ふ迄もなく詐僞の行爲ぢや、是は決して許されぬ、指一本でも付けさせては成ぬ、日本は速かに軍隊を進めて、租借權全部を占領する決意を以て、此の附帶の鐵道を占領しなければならぬ、鐵山に於いても同然ぢや。

舉國一致と政友會陣笠の大満足

さて戰爭となると、舉國一致は日本の特有の政治道徳である、其處で解散の恐がなくなつたと、欣喜雀躍する政友會の陣笠連が澤山ある、又お負けに來年の御即位式にも目出度參列が出來ると恐悅せるものもある、今や政争は中止となつて、舉國一致の精神が實現せらるゝ様になつて、國民の

熱心と來たら素破らしい勢ぢや。

減租熱の立消

都會では營業稅の全廢、地方では地租の輕減、此の二つが一般の人氣でいづれの政黨も幾分此の方面に注意を拂はないと、お困りの體であつたが愈日獨關係急を告げて、イザ開戦と云ふ風評が高くなると、地方の農民は今年に豊作で、戦争はあるし、此の場合に地租輕減など云ふ奴は非國民ぢやと、田舎のお爺さんが喇叭を吹き初める、都市の商工業者も其の勢に巻きこまれて、營業稅全廢は多年の主義であるけれども、國家危急存亡の此の場合中止せしと云ふ申出が、續々内閣に出てをると云ふ話で、政府萬歳を云ふ皮肉屋も少くない。(大正三年八月)

第七章 軍國議會と政局

時局と軍國議會

八月二十三日を以て日獨兩國が、交戦状態に入つたので、大隈内閣は臨事軍事費の協賛を求むる爲に、愈軍國議會を召集した、これは大隈内閣が此の議會に國民多數の意の在る所を確めておく事が、戦局を進める上に必要であつたから、立憲的に内閣の信任を議會に問ふ事になつた譯ぢや、其處で反對黨たる政友會、乃至國民黨などそれ〴〵態度を決するの必要が起つて來た。

國民黨と政友會の意向

さて愈議會召集となると各派孰れも自黨の態度を明にしなければならぬ同志會が政府黨たるが爲に、一も二もなく政府擁護の位置に立たなければならぬのは當然であるが、國民黨も現内閣に對して不平は多いが、時局が時局だとあつて、大隈内閣援助と云ふに一決し、政友會とても、政府反對と出ては國民の信任を失ふと御座つて。素直に政府を援助する様な意味合かと思ふと、中々以て开様でない嫌味タツブリの、條件附の政府援助と云ふに極つた。

新聞紙と國民の意向

政友會の機關新聞雜誌を除き、一般の輿論を搜るに、日英同盟の協約上東洋永遠の平和を謀る上、日本の軍事行動は已むを得ずと云ふに一致し、

大隈内閣の世評の善い事豫想外である、國民の大多數が長き間の外交不振を嘆息してゐた際であるから、今度の一大飛躍には反對するものがない、恁んな芝居が西園寺の和尚様や牧野のヌーボー男や、海賊の權兵衛や、政權爭奪の外に隠し藝のない、政友會の役者連に出來ますかと云ふ工合で、大隈加藤の評判と來たら素ばらしい者である。

臨時議會の召集

愈九月三日の議會召集となつて、與黨の同志會も反對黨の政友會も、準反對黨の國民黨も、所謂領袖よりして、有象無象の陣笠に至るまで、日比谷原頭に寄集つて、政友會控室では如何なる口實の下に大隈内閣に齧を附けるかと苦心慘憺、國民黨は大隈伯が犬養首領の北守南進論を用ひない

は怪しからんと罵り合ひ、同志會や中正會は戰局が如何に發展するかの問題で、控室に談論の火花を盛に撥散した。

開院式に原不敬

三日議會が成立する、四日開院式となる、車駕親臨、聖旨を賜ふと云ふ有り難き段取りとなつた、然れば此日は議員一同參列すべき日とあつて、一度官僚の仲間入りをした犬養木堂も、正三位の大禮服の裝束、其の他大石、元田、箕浦、早川と云ふ連中も、同じく四位以上の大禮服の出立、金色燦爛、四邊眩ゆき風情であつた、其の他の無官の大夫連は、いづれも五位鷲でも、鳥でもない、ズラリと燕尾服の行列ぢや、處が政友會總裁の原敬は怎した、前晚には政友會の代議士會で大演説を遣つたとやらに拘らす

大臣待遇の光榮を賜つたものは、議員連中我一人だと誇つて居た原敬は怎した、始から終まで一寸も顔を出さなかつた、國家危急存亡の場合と云ふ軍國議會の開院式に不參とあつては、少々原不敬ではあるまいか。

時局問題と初日の議會

大隈伯が大體の政府の方針を演ぶるに次いで、加藤男の外交の經過に對する詳細の演説、若槻藏相の軍事費の説明、之が濟むと先づ政友會の代表大岡硯海、國民黨の木堂明神の質問と御座つた、其れらを筆頭に各派陣笠連の質問が繁冗で、議會は賑かなのか、騒がしいのか分らない有様、政友會の不統一不謹慎を遺憾なく發揮した、或ものは政友會は獨逸政府から何事か頼まれたのではあるまいかと云ふ批評を下したが、何の事はない、權

に軍艦が出て居る、日英同盟の協約は東洋永遠の平和の維持に在つて、日本の態度は極めて公明正大なることを聲明したと言ふことぢや。

袁世凱と犬養木堂

然うすると今度は國民黨側から質問とあつて、犬養木堂の演説と來た、其の大體は山東省の鐵道問題は甚麼する、南洋に何故發展せぬ、外務省の官吏や、陸海軍の軍人中、支那の革命を煽動して之に參加してをるものがあるが、其れを甚麼取締處分するかとあつたので、加藤男は答へて开様云ふものは一人もないと云ふと、木堂忽ち大聲一喝、現に在ると毒ついた、开様すると國民黨の伊東知也などがブツ／＼怒つて、犬養と云ふ奴は、袁世凱の擁護をして、我々革命黨に同情を有してをる者の行動を束縛する不埒

な奴ぢや、彼奴何時から袁世凱と關係しをつたのか知らん、とは又餘りお目出度話ぢやないか。

孫逸仙と犬養木堂

一寸御慰に木堂の裏表を御覽に入る、何故犬養が外務省や陸海軍の大官に、革命派に關係してゐるものがあると云ふかの内幕を聞くと、亡命の孫逸仙が或日犬養木堂を訪問して、袁世凱は憎い奴ぢやから、此際仆して見たいと云ふと、木堂は其の瞬間限自己が袁世凱擁護掛であることを忘れて其れは愉快ぢや、大に遣りたまへ、我輩は助けると云ふたので、孫は忽ち油に乗つて、いや實に有難う、實は小池政務局長に此の事を話した處が、賛成してくれたと、支那流の外交辭令を振廻はしたのが本ぢやげな、其處

で犬養は外務省の大官が革命軍に参加してをると云ふのぢやげな、是れが事の實際らしいが、孫の言葉では餘り信用ならぬと云ふ評判ぢや、之を聞いた對支同志會の組は、怒るまい事か、非常に怒つて、犬養は袁世凱の犬ぢや、孫一派の計畫の裏を搔く奴ぢやと、憤慨してをるさうぢやげな。

大隈伯と政友會の陣笠

さて話は元へ戻つて、議會の其の後の模様を如何と言ふに、中正會の林毅陸、日支密約の有無を問ふと、是れは捏造でゐると云ふ加藤男の答辯が濟む、午前は之で打切、午後堀切善兵衛と云ふ政友會の一學者が、色々質問をした、聲が黄色で一向に振はなかつた、學者の愚問と來たら聞くものが倦去との評判ぢや。

豫算總會と政友會

豫算總會が二日に亘つて開かる、質問戦長たらしく、政友會の哩々連は大岡硯海を筆頭として、バイカル博士と竹越三又と云ふ、自稱外交通から有象無象の陣笠まで操出しての質問と御座つた、要するに愚問百出ぢや、試に其の二三を撮めば。

バイカル博士と加藤男

七博士時代に幅の利いた戸水博士も、議員になつてからは一陣笠の外ならず、此の日は一世代の大質問とあつた戸水博士「外務大臣は日本帝國の使命を解せりや」と真向から打ち向ふた、加藤男言下に起立し、日本帝國の使命は、東洋永遠の平和の維持に在りと信すとキツパリと答へたので、

バイカル博士はギャフンと參つて目を白黒、折角高飛車に出た質問も物にならず、頭掻き掻き引き下つた。

舉國一致を強いざる大隈伯

政友會の澤來太郎の現内閣は舉國一致を強ゆるかと云ふ質問に答へて、大隈伯は舉國一致は決して強いぬ、反對ならば反對せよ、賛成ならば賛成せよと云つたのが不都合であつて、唯さへ怪知を附けたがつてる政友會の哩々連は、奇貨措くべしと一生懸命伯に喰て掛つたが、結局冷靜に考へて見ると、餘りに事柄が充らんのので、大隈伯に警告すと云ふ、龍頭蛇尾に尻穂を結んだ、いやはや御苦勞千萬。

責任内閣と國民の信任

政友會が官僚政府と情意投合や妥協した時代とは今日時世が變つてをるから、内閣が不信任とあれば、議會を解散して國民に問ふが善い、大隈伯は既に決する所あつて、解散の詔勅を懷中して議會に臨んでをつたと云ふ、其れが事實であつたらしい。

舉國一致の議會

軍國議會の委員會で不體裁の陋態を遺憾なく發揮した政友會が、兎に角軍事費の協賛とあつて、本會議に移り、豫算委員長の井の角が大體の經過と結果を報告して、全會一致で可決したと云ふた處は善かつたが、大隈伯の言動に就いて、「全會一致で警告を與ふることに決議した」とやら云ふたので、議場は忽ち沸騰して、嘘言を吐くなど云ふ聲が、同志會側から盛に起つて

流石の井の角も一寸器量を下げ氣味であつた。

大岡硯海の失言

其の上院内總務の大岡硯海が、「只今の報告は多少齟齬した處がありま
す」と演べたので、今度は政友會の方面からドサクサ騒が持上つた、聞いて
見ると院内總務ともある大岡が、委員長の井の角の報告を否認するとは何
事かと云ふのであつたげな、さて愈本論に入れば相變らず三百的、非國民
的嫌味タツプリの演説であつたが、敵も味方も大岡さんの演説は聞くに苦
んだと云ふ評判であつたが、水雷艇の製造年月を暴露する如きは、軍器の
秘密を洩すもので御座ると、八代海相に突當つて、前大臣面をみると、八
代海相に水雷艇は勿論艦艇の製造年月は世界に公開してある、何も秘密で

御座らん、天下公知の事實で御座ると、竹篋返に遣り付けられて、大岡前
文部大臣の顔がギクリと參つて、強か政友會總務の面目玉を潰した。

中正會と國民黨の賛成

政友會の代表者に次いで演壇に上つたのは、中正會員の早速整爾と云ふ
人で御座つたが、餘り感心した演説ではなかつたが、論旨は確かに大隈内
閣の聽いて置くだけの價値があつたらしい、次に國民黨の總務犬養木堂と
御座つて、前日に於ける質問の様な袁探的の處は爪の垢程もなかつた、中
々甘く變るものぢや、さて論旨はと承ると、我輩が年來經費節減を唱へた
のは、今日の様な非常の場合に金を使ふのが目的と云ふ考であつたのぢや
ど、氣焔萬丈、傍聽席は犬養はヤツバリ偉いのと云ふ評判、國民黨の陣

笠は此處御大將の爲だどあつて、手をバチ／＼と叩く、すると第二の論點に入つて、金はどん／＼使へ、何程にても賛成すると云ふ勢ひで、最後の奥の手は何であつたかと云ふと、我輩の思ふ通りに遣るならば何處迄も賛成するが、思ふ通りに遣らなければ何時でも倒すと云ふ、大隈内閣に對する宣戰布告を前提とせる、最後通告演説であつた。

同志會代表の島田沼南

木堂の皮肉な反對を提げての賛成演説が濟むと、政府黨の島田沼南が演壇に現はれた、最初の二三分は可なりに上出来であつたが、政友會の豫算總會に於ける非國民的態度を素破抜かうとすると政友會は此處傍聽人に聽かさぬ事が大事ぞとあつて、二百に近き陣笠連は盛に妨害する、國民黨の

哩々連も日頃の政國合同の忠勤振を發揮して妨害する、何事の演説であつたか、到頭分らず仕舞であつた、政府賛成の演説を衷心より遣つた事だけは事實である、跡で政友會の陣笠に承はると、大岡の演説は遺憾ながら三百的であつたが、島田の皮肉も、餘り過るので妨害して言はさなかつた、丁度これで大岡と島田の帳消となつた譯ぢや、唯犬養は狐になつて、傍聽人の鼻を工合好く摘んだ奴さ、ア—ッハ、ハ、ハ、ハ。

權兵衛の暗中飛躍

木堂の最後通牒演説を、絶對的賛成演説と解釋した素人の手合も多かつたけれども、我輩の觀測が先づ誤らない處である、處が犬養と因縁淺からぬ權兵衛は此の間に何をしてをつたかと云ふと、薩派の郎等を驅り集めて、

日比谷で國民大會を開いて、大隈内閣を倒すとか、新聞社に御用金を廻はして、大隈内閣に毒吐かすとか云ふ事を盛に遣つたが、時甚だ非なりと見えて、何でも五六萬圓を散財したと云ふ評判を聞いたが、効果の無かつたのは事實である。

大隈内閣の前途

非國民的態度を取つた政友會は不様な賛成方を遣り、國民黨は宣戰布告前提の最後通牒を大隈内閣に突付け、權兵衛は薩派の郎等を嘯聚して政國兩黨に色目を使つて、暗中飛躍を講ずると云ふ有様であるが、政局の前途は意外に混沌となつて來た、大隈内閣が續くにも續かぬにも、もはや問題は單純に成て來た、外交問題の終局は如何、五千三百萬圓の國費を使ふて、

如何なる効果が收められ得べきかと云ふことが、六千萬國民の與聞したい所である。

政國の活動と同志會の對抗

其處で愈舉國一致の表面の下に國民の意向の孰に在るやを問ふ必要が起つて、地方遊説は已むを得ない、政黨各派は自己の立場を將來に明にしておく必要がある、政友會は大隈内閣に外交上の怪知を附くるのみならず、大隈内閣の口約した行政整理、税制整理が出来ぬとあつて、嘔吐内閣と云ふ演説をやるに云ふ計畫、國民黨は又相當の方便を以て、此處御都合の好き大隈内閣擁護的破壊演説を遣ると云ふ政略、同志會は甚麼云ふかと聞くと、行政整理と、財政整理とは、臨時事件突發の爲に出來ぬのは當り前、外交

問題は國民の多數に適ふ外交を屹度政府に遣らして見せる、往かなければ大隈内閣と絶縁する耳と云ふ態度ぢやさうな。

後繼内閣と西園寺内閣

大隈内閣が外交上で成功すれば、壽命はもう四五年續くが、一度蹉跌して國民に怨を買ふと、内閣は瓦解するより仕方がない、ソコで後繼内閣の覬覦者が二人ある、一人は海賊の山本權兵衛で、他の一人は聖旨を反古にした不忠の臣西園寺公望で、處で犬養は權兵衛に熱心ぢやが、原は大勢の上から權兵衛は駄目ぢや、今度は同志會が大隈伯を總理に擔いだ故智を學ぶに如くなしとあつて、大命を西園寺侯に賜はる事にして、西園寺侯は大命を拜するや否や政友會の總裁原敬に御相談と云ふ手續になつてをる

げな。

西園寺侯と國民

先づ狂言の筋書は樂屋で此の通に極つてをるが、さて見物人たる國民は是れで承知する歟甚麼歟である、國民は山權のやうな大泥棒は眞平御免、西園寺侯の様な不忠の臣は國民教育の上から國家の師表に仰ぐ譯に往かぬと、大々的反對を言ふので、流石權謀術數の原敬も、聊か當惑の體ぢやげな、少し智慧のあるものが、何か善い工夫を原敬に貸したら甚麼うちやと云ふ下馬評ぢや。

議會解散と各派の盛衰

さて内閣の更る前には、解散も年中行事の一とあつて、無くて叶はぬ事